津山市埋蔵文化財発掘調査報告第46集

門の山古墳群

1992

佐良山門の山古墳群発掘調査委員会

津山市教育委員会

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第46集

門の山古墳群

1992
佐良山門の山古墳群発掘調査委員会
津山市教育委員会

序

津山市は、中国山地の山懐に広がる盆地に形成され、市内の中心部を岡山県の三大河川の一つ吉井川が流れております。和銅6（713）年に備前国から分国して美作国ができますとその国府が置かれ、江戸時代には津山城を中心とした城下町として発展いたしました。現在では中国自動車道の開通により、西日本の物資流通の拠点的な役割を担っております。

さて、門の山古墳群は一般に『佐良山古墳群』と呼ばれております古墳群の一支群に属しておりまして、円墳十数基で構成されております。今回の調査は民間宅地造成に伴う開発でありますが、予定敷地内には4基の古墳が存在し、その内保存措置のおこなえなかった3基の古墳を調査し、1基は辛くも現状で保存措置を講ずることができました。開発と文化財保護の問題では多くの場合が記録保存のみで姿を消していっております。今回はその内の1基ではありますが開発事業者の御協力により保存できたことは、この上ないことと思っております。

今回の調査で門の山古墳群の様相が徐々に明らかになってまいりました。『佐良山古墳群』はいわゆる横穴式石室を埋葬施設にもつ古墳時代後期の古墳が多いのでありますが、本古墳群はそれらより若干古い時期の古墳群であることが判明いたしました。今回の調査成果は古墳時代後期の横穴式石室導入前後の墓制の変遷を解明する、一つの手助けになるものと考えられます。

ここにささやかではございますが、情報を一早く提供したいと言う立場から報告書を刊行いたしました。関係各位の御活用をいただければ幸いでございます。

なお、末筆ではございますが発掘調査から報告書作成にいたるまでご協力いただいた関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成4年6月30日

佐良山門の山古墳群発掘調査委員会

委員長　村　上　　光

例　　言

1．本書は民間宅地造成事業に伴う門の山古墳群（8・9・14号墳）の発掘調査報告書である。

1．発掘調査にかかる経費はすべて原因者の負担によるものである。

1．発掘調査は、「佐良山門の山古墳群発掘調査委員会」を設置し、平成3年11月26日から平成4年1月27日まで実施した。発掘調査は津山弥生の里文化財センター主事行田裕美・同主事小郷利幸が担当しておこなった。

1．本書に使用したレベル高は海抜である。また、方位は磁北である。

1．本書第1図に使用した「周辺遺跡分布図」は、建設省国土地理院発行2万5千分の1「津山西部」を複製したものである。

1．本書の執筆・編集は小郷が担当した。

1．発掘調査及び遺物整理には宮下祐子、平岡正宏、牧野　博、野上恭子、岩本えり子、家元博子、赤坂博子、中谷幸子、田中裕子の協力を得た。

1．出土遺物・図面等は岡山県津山市沼600-1、津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センターで保管している。

目　　次

Ⅰ　遺跡の立地と周辺の遺跡 …… 1
　1　遺跡の立地 …… 1
　2　周辺の遺跡 …… 1
Ⅱ　調査の経過 …… 4
　1　調査に至る経過 …… 4
　2　調査経過 …… 4
　3　調査体制 …… 4
Ⅲ　調査の記録 …… 10
　1　門の山8号墳 …… 10
　2　門の山9号墳 …… 16
　3　門の山14号墳 …… 22
　4　その他の遺構・遺物 …… 28
Ⅳ　まとめ …… 31
　1　門の山古墳群の群構成と築造時期について …… 31
　2　美作における横穴式石室導入前の群集墳について …… 34
附編　津山市平福古城古墳群発掘調査報告 …… 56

挿図目次

第1図　周辺遺跡分布図 …… 2
第2図　門の山・寺山古墳群分布図 …… 7
第3図　門の山8·9·14号墳調査前墳丘測量図 …… 8
第4図　門の山8·9·14号墳墳丘測量図 … 9
第5図　門の山8・9・14号墳全景 …… 9
第6図　門の山8号墳全景 …… 10
第7図　門の山8号墳平・断面図 …… 11
第8図　8号墳埋葬施設平・断面図 …… 13
第9図　8号墳埋葬施設検出状況 …… 13
第10図　8号墳出土遺物 …… 14
第11図　8号墳出土遺物 …… 15
第12図　門の山9号墳全景 …… 16
第13図　門の山9号墳平・断面図 …… 17
第14図　9号墳埋葬施設平・断面図 …… 18
第15図　9号墳埋葬施設出土遺物 …… 19
第16図　9号墳埋葬施設 …… 19
第17図　9号墳遺物出土状況(1) …… 19
第18図　9号墳遺物出土状況(2) …… 19
第19図　9号墳周溝内出土遺物 …… 20
第20図　9号墳周溝内出土遺物 …… 20
第21図　9号墳埋葬施設出土遺物 …… 21
第22図　門の山14号墳全景 …… 22
第23図　門の山14号墳平・断面図 …… 23
第24図　14号墳埋葬施設平・断面図 …… 24
第25図　14号墳埋葬施設 …… 25
第26図　14号墳遺物出土状況(1) …… 25
第27図　14号墳遺物出土状況(2) …… 25
第28図　14号墳埋葬施設出土遺物 …… 26
第29図　14号墳埋葬施設出土遺物 …… 27
第30図　土壙平・断面図 …… 28
第31図　土壙遺物出土状況 …… 28
第32図　土壙出土遺物 …… 29
第33図　土壙出土遺物 …… 30
第34図　須恵器・杯法量図 …… 32
第35図　美作地方首長墳分布図 …… 35
第36図　美作地方須恵器変遷図 …… 37～38
第37図　横穴式石室導入前の群集墳と首長墳(皿·香々美川流域) …… 41
第38図　横穴式石室導入前の群集墳と首長墳(広戸·加茂川流域) …… 43～44
第39図　横穴式石室導入前の群集墳と首長墳(梶並·滝川流域) …… 49～50
第40図　門の山12号墳出土遺物(1) …… 58
第41図　門の山12号墳出土遺物(2) …… 59
第42図　門の山12号墳出土遺物 …… 60

表目次

第1表　周辺遺跡分布図対照表 …… 3
第2表　佐良山門の山古墳群発掘調査委員会 6
第3表　門の山・寺山古墳群一覧表 …… 6
第4表　8・9号墳出土遺物観察表 …… 21
第5表　14号墳出土玉類観察表 …… 26
第6表　14号墳出土須恵器観察表 …… 27
第7表　土壙出土弥生土器観察表 …… 30
第8表　導入前の群集墳·首長墳の変遷(皿川流域) …… 42
第9表　導入前の群集墳·首長墳の変遷(広戸川流域) …… 45
第10表　導入前の群集墳·首長墳の変遷(加茂川流域) …… 46
第11表　埋葬施設等消長表 …… 51
第12表　12号墳出土須恵器観察表 …… 57

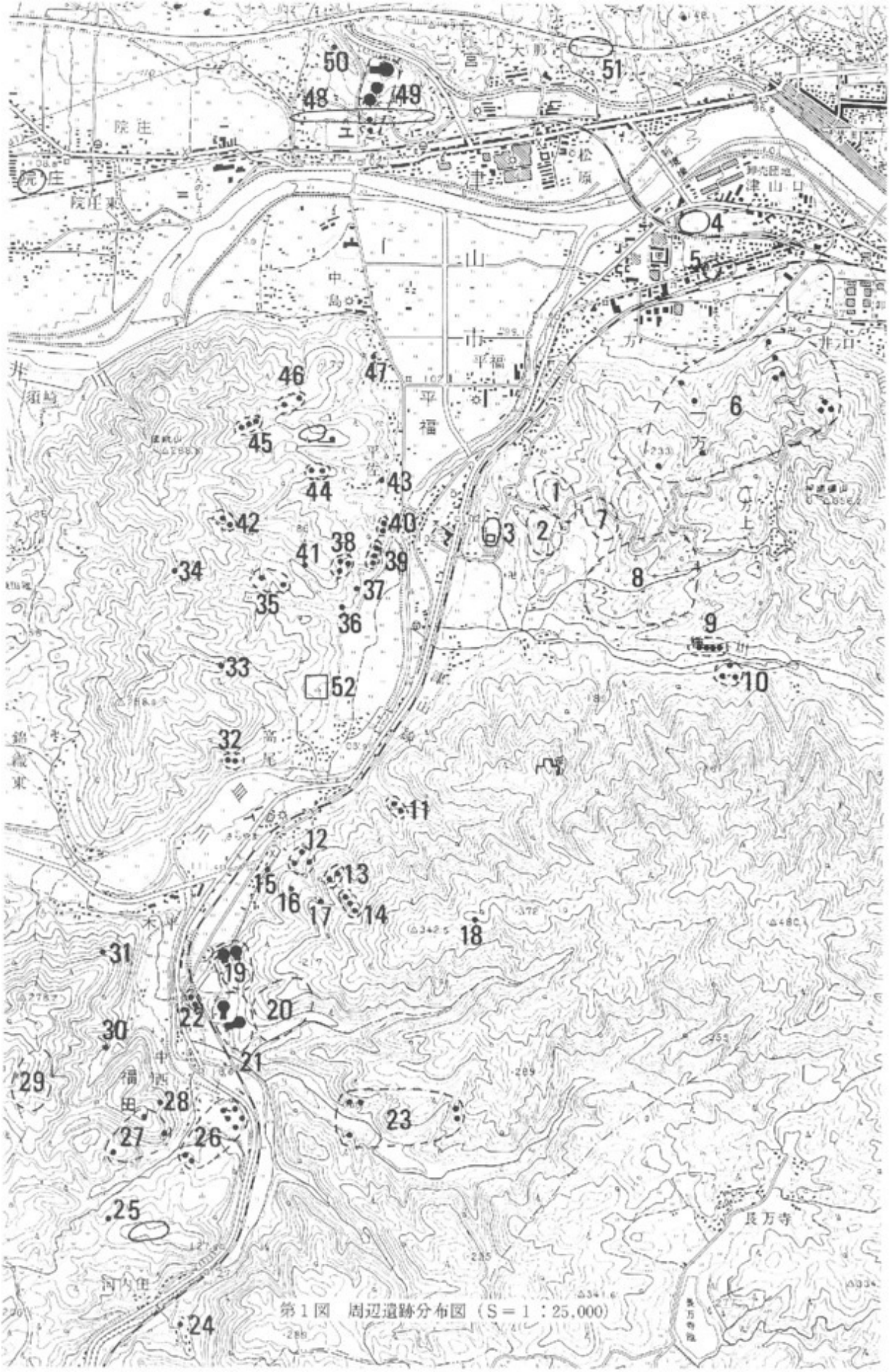
Ⅰ　遺跡の立地と周辺の遺跡

1　遺跡の立地

門の山８・９・14号墳は、岡山県津山市平福281-1番地に所在する。津山市の南西部で吉井川の支流皿川は南から北へ流路をとりその両岸には、相対峙する形で樹枝状の丘陵が迫っている。そのためこの皿川沿いは谷状を呈する地形が続き、耕作を行うような平野部はそれほど多くは存在しない。その中で本古墳群は東方の神南備山（標高356ｍ）から西へ派生した丘陵先端部のややなだらかな頂部に立地しており、本古墳群からは北西方向の視界が開けており、この眼下には皿川と吉井川との合流地点で、現在では佐良山地域で一番広い水田耕作地帯を見下ろす事ができる。本古墳群の立地する辺りは標高158～159ｍ、周辺平野部との比高差は約60ｍを測る。

2　周辺の遺跡（第１図）

本古墳群は、一般に佐良山古墳群（註１）と呼ばれている皿川一帯地域の北方左岸の丘陵上に立地している。周辺では弥生時代の遺跡はあまり知られていないが、特殊器台の出土した丸山遺跡（註２）や工事中に弥生土器片が発見された津山口駅前遺跡（註３）などがある。また、古墳としては皿川を挟んだ両岸に小規模の古墳群が多数見られ、主なものとしては円墳数基からなり竪穴式石室を主体部にもつものを含む寺山古墳群（註４）、横穴式石室のカキ谷Ａ・Ｂ古墳群（註５）、帆立貝式の古墳で県下最古級の横穴式石室を持つ中宮古墳群（註１）、前方後円墳に横穴式石室をもつ高野山根古墳群（註６）、直径19ｍ程の円墳２基が隣接しそれぞれ全長約9.5ｍ程の横穴式石室をもつ剣戸東塚・西塚古墳（註７）などがある。また皿川左岸の小屋谷地域で須恵器窯の遺物が採集されている（註８）が、現状ではその位置は確認されていない。さらに北方の吉井川対岸には、美作地方で最大規模の全長80ｍの前方後円墳と直径30ｍの円墳からなる美和山古墳群（註９）が存在する。なお門の山古墳群中の１号墳に関してはすでに調査されており、葺石をもつ五角形に近い墳丘から箱式石棺３基が検出されている。いずれからも出土遺物が皆無であり所属時期は不明である（註１）。さらに12・13号墳（古城１・２号墳）も観光道路建設に伴って調査され、両墳とも直径10ｍ程の円墳で、12号墳には２基の竪穴式石槨があり須恵器、鉄鏃などが出土している（註10）。尚、古墳の名称については『佐良山古墳群の研究』の番号を尊重し、新たに発見された古墳はこれらの続き番号とした。今回の分布調査の結果５基の古墳が新規に発見され、これらは前述のように続き番号で14～18号墳と呼称している（第３表）。よって今回調査した古墳は、門の山８・９号墳と新規に発見された14号墳の３基である。



第1図　周辺遺跡分布図（S＝1：25,000）

1．門の山古墳群	14．高尾三ツ塚古墳群	27．奥山ロ古墳群	40．桑山古墳群
2．寺山古墳群	15．御笠美下大塚古墳	28．うのめ古墳	41．下山田上古墳
3．丸山遺跡	16．大塚上古墳	29．福田三ツ塚古墳群	42．火の釜古墳群
4．一方北遺跡	17．御笠美古墳	30．奥の谷古墳	43．平佐古墳
5．津山口駅前遺跡	18．比久尼塚古墳	31．岡の乱古墳	44．祇園畝古墳群
6．一方北古墳群	19．中宮古墳群	32．西の岡古墳群	45．平福三ツ塚古墳群
7．煙硝庫古墳群	20．剣戸古墳群	33．城成古墳	46．中堂古墳群
8．寺池東古墳群	21．高野山根古墳群	34．高塚古墳	47．片山古墳
9．カキ谷Ａ古墳群	22．福田丸山古墳群	35．中山田古墳群	48．二宮遺跡
10．カキ谷Ｂ古墳群	23．小屋谷古墳群	36．弁慶岩古墳	49．美和山古墳群
11．中曽根古墳群	24．滝の元古墳	37．正京茶畠古墳	50．後山古墳
12．高尾丸山古墳群	25．高清水古墳	38．細畝古墳群	51．二宮大成遺跡
13．御笠美下古墳群	26．岩林古墳群	39．桑山南古墳群	52．高尾廃寺

第１表　周辺遺跡分布図対照表

（註１）中島謙雄・近藤義郎『佐良山古墳群の研究 第１冊』津山市　1952年

（註２）河本清「津山市丸山遺跡発見の遺物」『津山市文化財年報１』津山市教育委員会　1975年

（註３）河本清「津山口駅前発見の土器」『津山市文化財年報１』津山市教育委員会　1975年

（註４）河本清「美作津山市寺山Ａ１号墳」『古代吉備 第６集』古代吉備研究会　1969年

（註５）半井泰男『カキ谷Ｂ１号墳』カキ谷Ｂ古墳群１号墳埋蔵文化財発掘調査委員会　1987年

（註６）安川豊史「高野山根１号墳・２号墳」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会　1986年
内山敏行・大谷晃二・田中弘志「佐良山古墳群高野山根２号墳について」『古代吉備 第13集』古代吉備研究会　1991年

（註７）安川豊史「剣戸塚西塚・東塚」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会　1986年

（註８）津山市教育委員会で遺物を保管している。

（註９）中山俊紀「史跡 美和山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第42集』津山市教育委員会　1992年

（註10）今井堯・河本清「津山市平福古城古墳発掘報告」『津山市文化財調査略報 第１集』津山市教育委員会　1960年、本報告書附編参照

Ⅱ　調査の経過

1　調査に至る経過

本遺跡内で宅地造成計画が具体化したのは平成３年４月である。この対象地内は周知の遺跡（津山市遺跡地図No.78・門の山古墳群）であるため、遺跡の保護措置について開発事業者 津山市高野本郷1571-14 有本俊夫氏と協議し、平成３年11月15日付けで「開発事業実施にともなう埋蔵文化財保護に関する覚書」を同氏と結び、対象地内３基の古墳の内一番北に位置する仮称３号墳（７号墳）は開発対象地から除外し現状で保存措置を図る事、さらに事業実施にあたって保存困難な仮称１・２号墳（８・９号墳）２基については、佐良山門の山古墳群発掘調査委員会に発掘調査を委嘱する事などを確認した。同時に同氏承諾の元、文化財保護法第57条の２第１項に基づく「埋蔵文化財発掘届出」が、また調査を委嘱されている佐良山門の山古墳群発掘調査委員会委員長 村上光から文化財保護法第57条第１項に基づく「埋蔵文化財発掘調査の届出」が文化庁長官宛に提出された。調査実施にあたっては再度同氏と調査委員会とが「発掘調査委託契約書」を締結し、調査を実施するにいたった。調査面積は約650㎡である。

2　調査経過

平成３年11月18日に調査前の地形測量、11月26日に重機で表土剥ぎを行った。12月２日から人力により各古墳の調査を開始したが、仮称１・２号墳（８・９号墳）の間の斜面部に新たに古墳が見つかったため、調査古墳の総数は３基となった。この古墳は新規であるため続き番号から仮称４号墳（14号墳）と呼称する事とした。調査はまずすべての古墳の周溝を全掘し、それから各古墳の埋葬施設の検出を行う方法をとった。すべての埋葬施設が検出され、新たに仮称１号墳（８号墳）の旧表土面から弥生時代の遺構が検出された。そのため可能な限り下層遺構の検出にも努めた。平成４年１月16日に古墳群全景の航空写真を撮影し、１月27日に全調査は終了した。その後平成４年４月30日まで遺物整理をおこない報告書を作成した。

3　調査体制

発掘調査は、津山市教育委員会と開発事業者 津山市高野本郷1571-14 有本俊夫氏の両者で構成する「佐良山門の山古墳群発掘調査委員会」を設置して実施した。

調査委員会の会則及び調査組織は以下のとおりである。

佐良山門の山古墳群埋蔵文化財発掘調査に伴う文化財調査委員会会則

（設　置）

第１条　津山市平福281-1番地内でおこなわれる宅地造成工事に伴う門の山古墳群の発掘調査を実施するために佐良山門の山古墳群発掘調査委員会（以下「委員会」という）を設置する。

（目　的）

第２条　委員会は、津山市平福281-1番地でおこなわれる宅地造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存の措置等をおこなうことを目的とする。

（事　業）

第３条　委員会は、前条の目的を達成するため次の事業をおこなう。

(1)津山市平福281-1番地に所在する門の山古墳群の埋蔵文化財の発掘調査に関すること。

(2)その他、この目的を達成するために必要な事業

２　前項の事業に必要な経費は、開発事業者 津山市高野本郷1571-14 有本俊夫が負担する。

（組　織）

第４条　委員会は、津山市教育委員会職員で構成し、委員長は津山市教育委員会教育次長、副委員長は同文化課長をもって充てるものとし、委員は教育委員会文化課職員の中から委員長が委嘱する。

２　委員会は、発掘調査を専門的に実施するために調査員をおき、その調査員は委員長が委嘱する。

３　委員長は、委員会を代表し会務を掌握する。

４　副委員長は、委員長を補佐し委員長に事故あるときはその職務を代行する。

（任　期）

第５条　委員長、副委員長及び委員の任期は調査が完了するまでとする。ただしそれぞれの期間の役職にある期間に限るものとする。

（会　議）

第６条　委員会は、必要におおじ随時委員長が招集する。

（事務局）

第７条　委員会の事務を処理するため、津山市教育委員会津山弥生の里文化財センターに事務局を置く。

（監　査）

第８条　会計監査を実施するため、委員会に監事２名を置く。

（補　則）

第９条　この会則に定めるもののほか、委員会の運営に関して必要な事項は、委員会が定める。

（附　則）

この会則は、平成３年11月15日から施行する。

役職名	氏名	所属
委員長	村上　光	津山市教育委員会次長
副委員長	森元弘之	津山市教育委員会文化課長
委員	中山俊紀	津山市弥生の里文化財センター次長
	安川豊史	津山市教育委員会文化課主任
	行田裕美	津山市教育委員会文化課主事
	小郷利幸	津山市教育委員会文化課主事
	木村祐子	津山市教育委員会文化課主事
	平岡正宏	津山市教育委員会文化課事務員
監事	福島敏也	津山市教育委員会庶務課長
	有本俊夫	開発事業者

事務局

役職名	氏名	所属
事務局長	須江尚志	津山弥生の里文化財センター所長
事務局次長	中山俊紀	津山弥生の里文化財センター次長
事務局員	行田裕美	津山市教育委員会文化課主事
〃	木村祐子	津山市教育委員会文化課主事

第２表　佐良山門の山古墳群発掘調査委員会

発掘調査協力者　河本乙彦、沢　慶護、沢　保、山口　晃、平井泉彦、藤原福一、吉田礼一

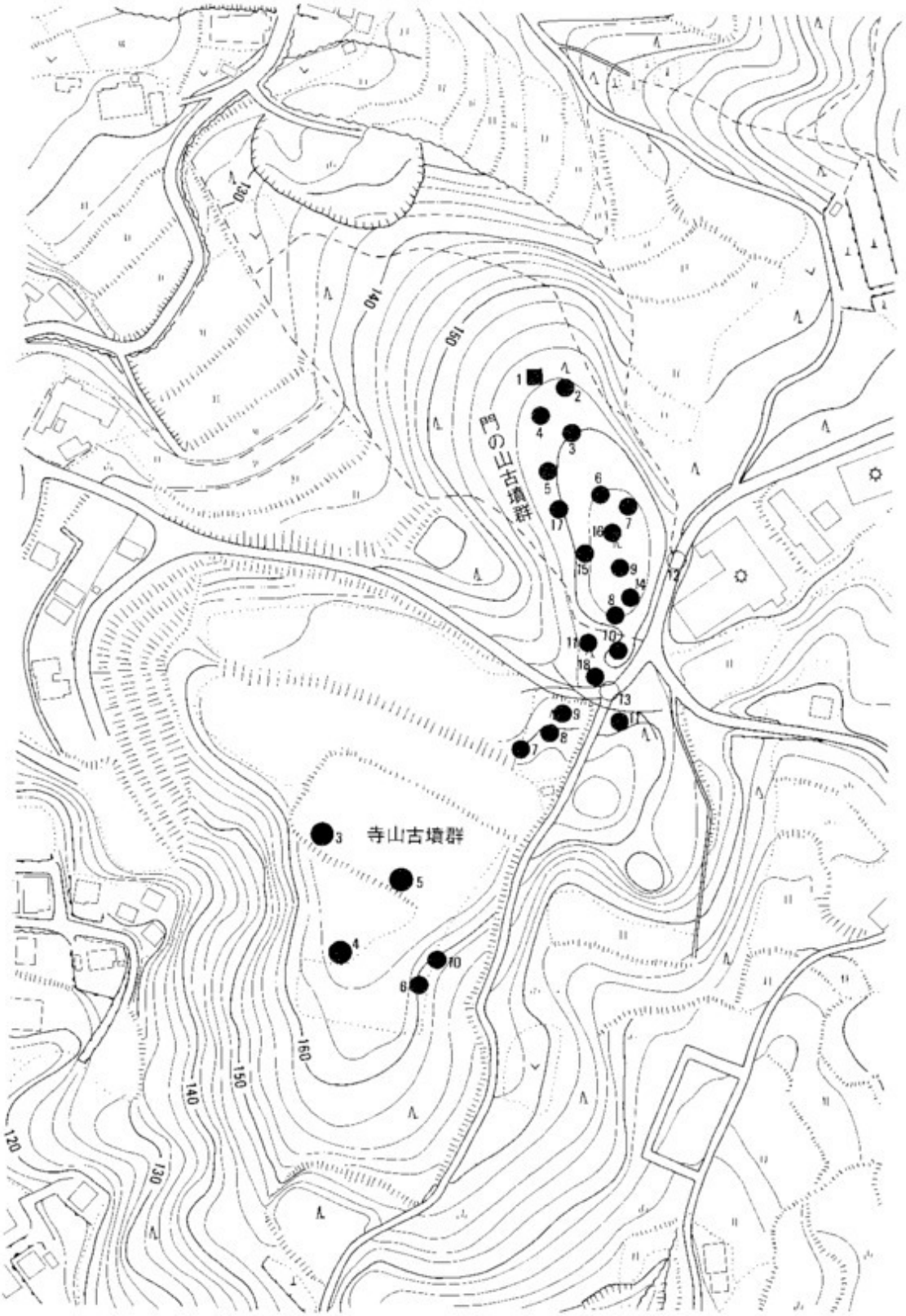
門の山古墳群　　（番号は第２図、単位：m）

No	墳形	規模	概要	No	墳形	規模	概要
1	五角形	11×8	箱式石棺3基、出土遺物無し、葺石	10	円	13.0	
2	円	7.5		11	円	7.5	
3	円	8.5		12	円	9.5	竪穴式石槨2、須恵器、鉄鏃、消滅
4	円	8.5		13	円	10.0	横穴式石室(?)、須恵器、土師器、消滅
5	円	12.5		14	円	6.8	木棺1、須恵器、玉類(管玉、小玉、棗玉)
6	円	10.0		15	円	8.0	新規古墳
7	円	9.0		16	円	7.5	〃
8	円	9.5	木棺3(?)、須恵器、鉄刀、鉄鏃、刀子	17	円	8.5	〃
9	円	8.0	木棺1、鉄刀、鉄鏃、須恵器	18	円	8.0	〃

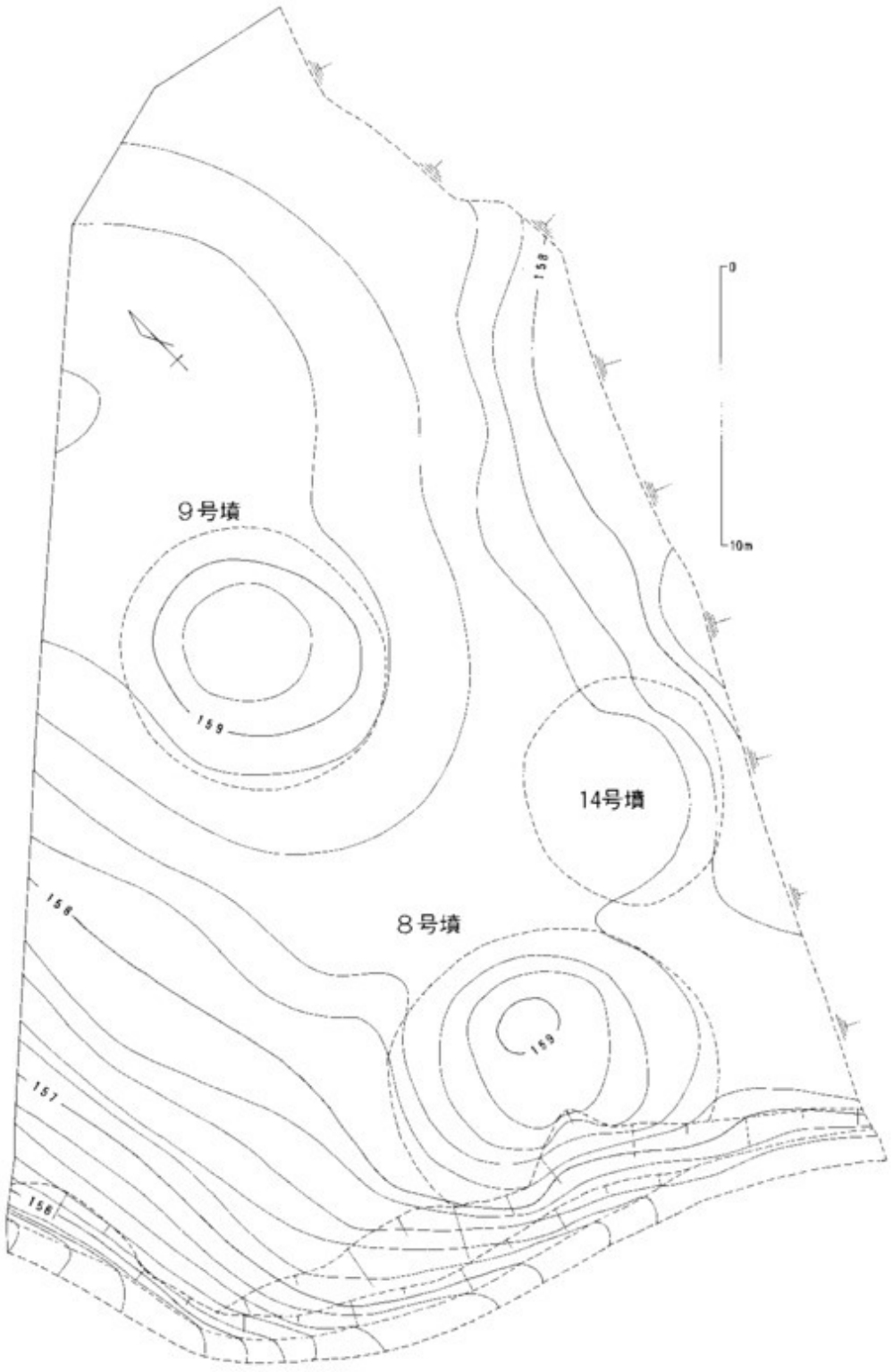
寺山古墳群

No	墳形	規模	概要	No	墳形	規模	概要
1	円	14.6	竪穴式石槨3、須恵器、玉類など、消滅	7	円	6.6	玉類、刀子
2	円	12.5	竪穴式石槨、玉類、鉄鏃、消滅？	8	円	6.7	
3	円	14.1	竪穴式石槨、須恵器	9	円	6.0	古墳でない可能性がある
4	円	20.0	竪穴式石槨？、2号墳の可能性もある	10	円	10.0	4号墳の可能性もある
5	円	11.4	竪穴式石槨	11	円	6.0	新規古墳
6	円	9.0	横穴式石室	※1・2号墳の位置は不確かである			

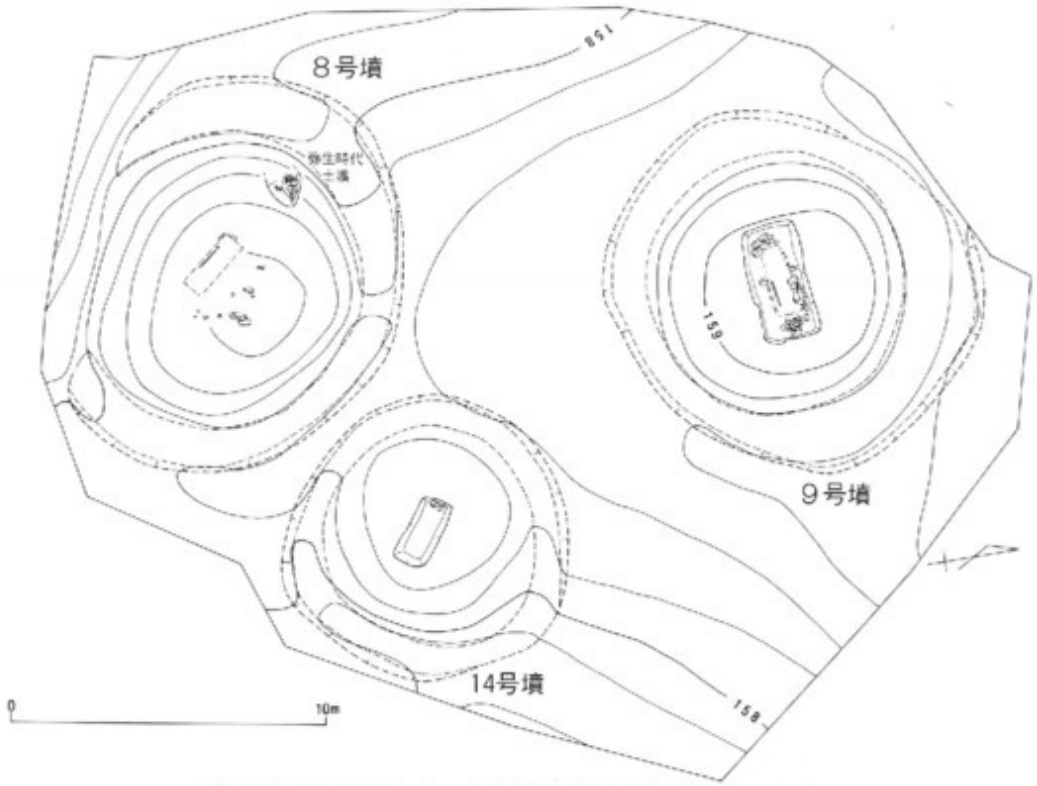
第３表　門の山・寺山古墳群一覧表



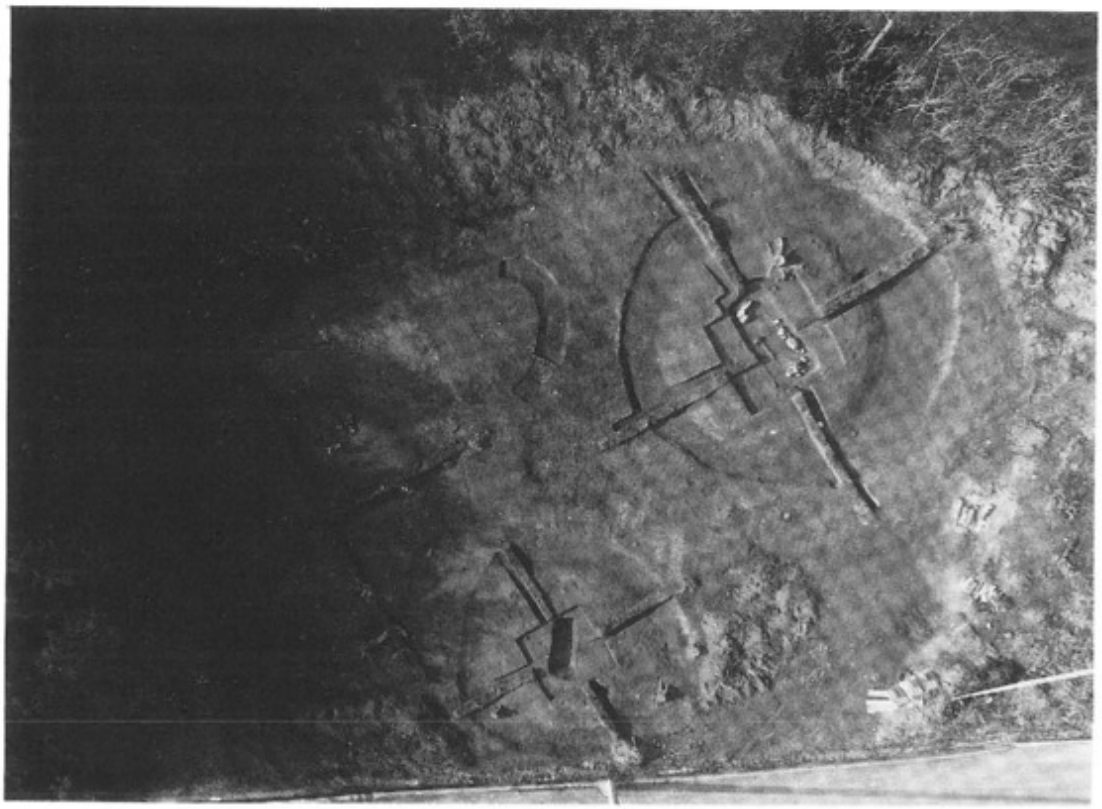
第２図　門の山・寺山古墳群分布図（S＝１：2,500）



第３図　門の山８・９・14号墳調査前墳丘測量図（Ｓ＝１：250）



第4図　門の山8・9・14号墳墳丘測量図（S＝1：250）



第5図　門の山8・9・14号墳全景

Ⅲ　調査の記録

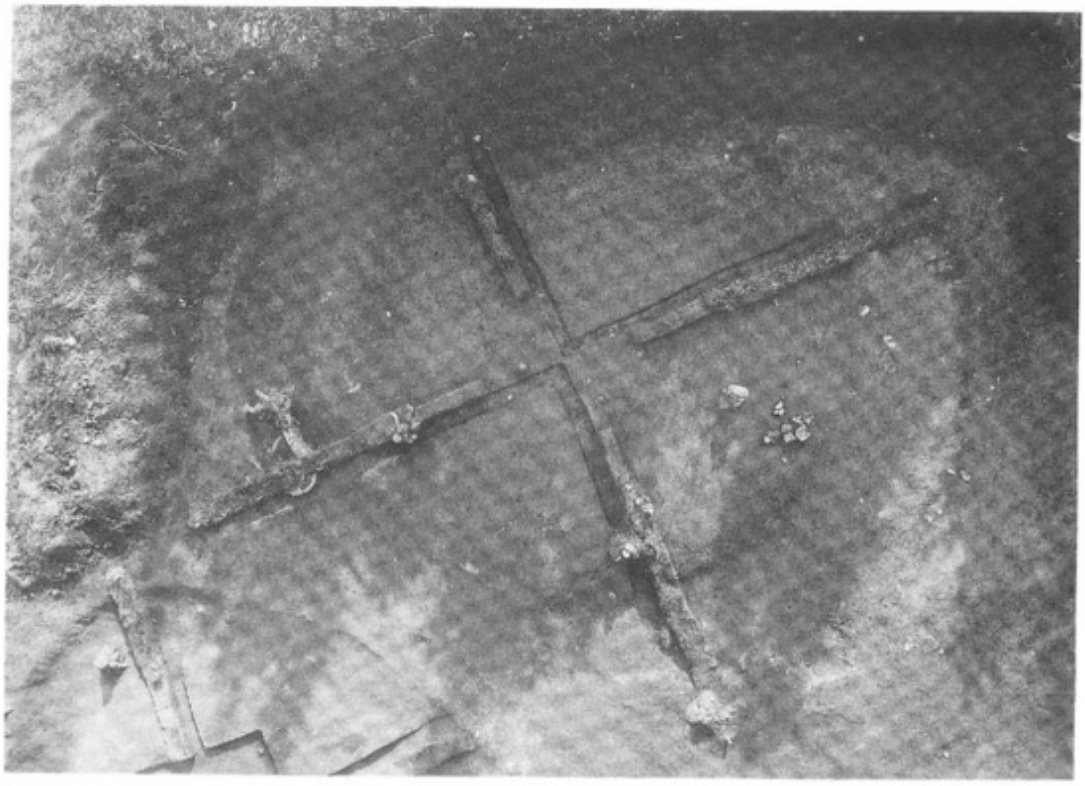
1　門の山８号墳

(1) 立地と調査前の状況

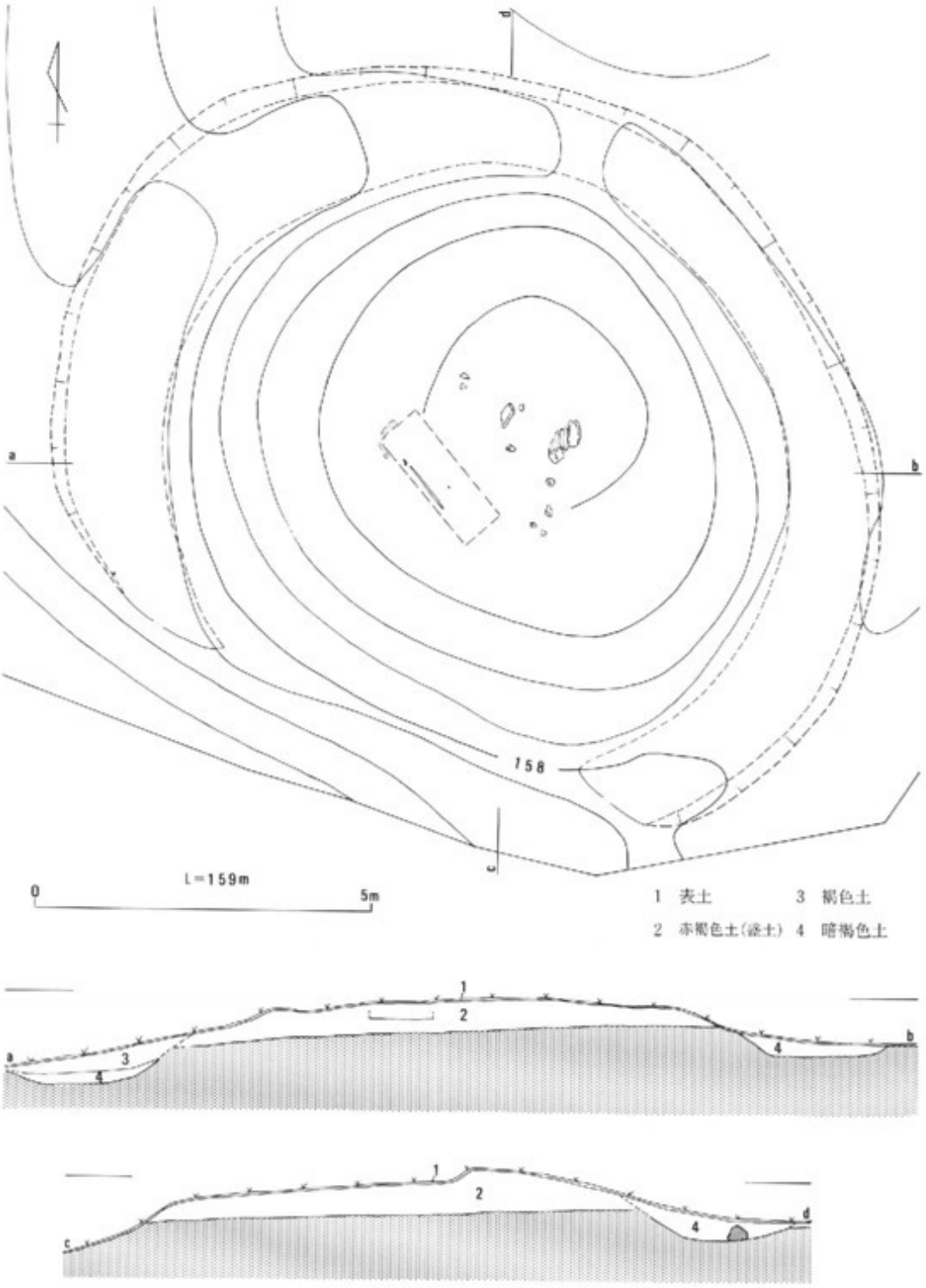
本調査区の南端、丘陵の最高所からやや下った尾根上に位置し、墳丘南側は林道で一部切られている。墳丘内には目立った乱掘穴は見られない。ほぼ円形に巡る周溝の存在が予期され、現状で高さは約１ｍを測る。林道と隣接して直径13ｍほどの10号墳が存在する。

(2) 墳丘（第７図）

直径9.5ｍ（周溝を含めると13ｍ）程の円墳で南端は林道で削られているものの、本来は周溝が全周していた可能性が大きい。ただ調査区外に本墳よりやや大きい10号墳が近接して存在し、さらに林道によって削られているため両者の前後関係は明確ではない。高さは東側で0.85ｍ、西側で1.25ｍを測る。葺石などは伴わず盛土はほぼ一層で約45㎝残存する。墳丘は周溝を円形に巡らし地山面をほぼ平らに仕上げこの上に盛土をおこなって構築している。ただ埋葬施設の掘方が明瞭でない事から墳丘の構築と同時に埋葬施設を作っている可能性も考えられるが、複数の埋葬施設が存在するため、どのような埋葬方法をとったのかは明確ではない。ま



第６図　門の山８号墳全景



第7図　門の山8号墳平・断面図（S＝1：100）

た、墳丘はかなりの削平を受けているものと考えられる。

(3) 周溝（第7図）

周溝は現状では南端を除きほぼ全周する。幅は最大で2m、深さ0.5mを測り、断面は底がやや平らな緩やかなU字形である。内部からやや大きめの石が数点出土しているが、これらは何らかの施設に伴うものではない。北西側の周溝内及び墳丘斜面から須恵器・甕のほぼ一個体分がかなり破片となって出土した。その状況からこの須恵器は本来墳頂部付近に供献されていた可能性が大きい。また周溝法面に弥生時代の遺構が見られる事から、古墳築造時に弥生時代の遺構をかなり壊しているものと考えられる。

(4) 埋葬施設（第8図）

墳丘中央部で表土除去と同時に鉄刀、石、粘土などがかなりの広範囲に出土した。そのため平面的な精査と土層による確認をおこなったものの明瞭な掘方は検出されなかった。西側の鉄刀（5）、鉄鏃（7～9）、粘土の出土状況からここに一つの埋葬施設が考えられ（破線部分）、さらに東側でも出土遺物は見られないものの、粘土、石などがある程度まとまって出土している事から、この部分にも何らかの施設があったことは確かである。ちなみにこの粘土や石は木棺据え付けの際の補強に使用されていた事が、9号墳の埋葬施設の様相から伺える。さらにこれらよりレベル的に下層から出土した須恵器（1・2）、刀子（10）の部分にも埋葬施設が考えられ、少なくとも木棺3基は存在していた可能性が大きい。ここでは掘方が明瞭でないものの遺物などの依存位置から推測し鉄刀の部分を第1主体、その東側を第2主体、須恵器の部分を第3主体として以下説明を加える事とする。

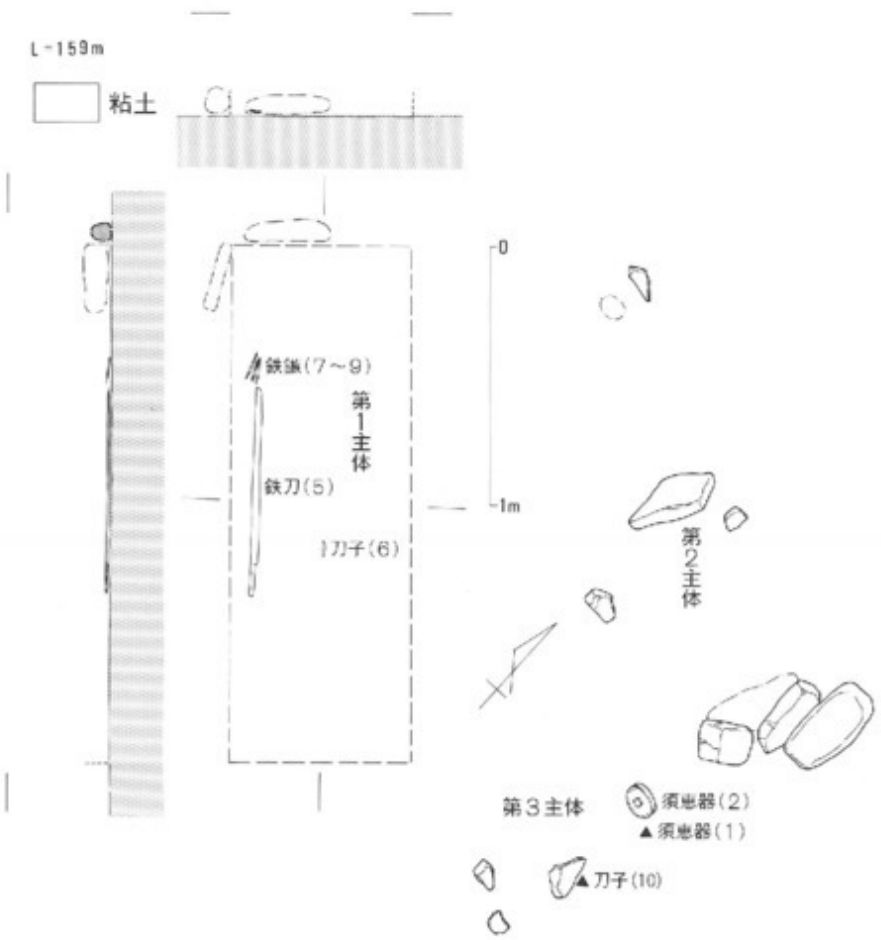
第1主体　掘方は明瞭でないが遺物や粘土の出土状況から木棺の痕跡部分が推定復元できる。北西部分で粘土がL字形に配される事からこの部分が木棺のコーナーの一つである。この部分以外の木棺の痕跡は確認されていない。そのため木棺の規模は不明である。主軸は尾根線に対し斜交し南東方向を向いている。出土遺物は西側で鉄刀1（5）、鉄鏃3（7～9）、やや中央部分で刀子1（6）が出土している。出土遺物の状況から南東方向が頭位と考えられる。

第2主体　小口と思われる部分の粘土と支えのための石や粘土が出土したにすぎず、木棺痕跡は明瞭でない。小口部分の粘土を尊重すると、第1主体よりはやや斜交する埋葬施設が復元できる。出土遺物は皆無である。

第3主体　第1・2主体よりは下層から検出された。木棺痕跡などは明瞭でないが、須恵器有蓋高杯蓋2（1・2）、刀子1（10）がまとまって出土している。須恵器はほぼ近接しやや傾いた状態で、刀子は須恵器よりやや離れたところから出土している。

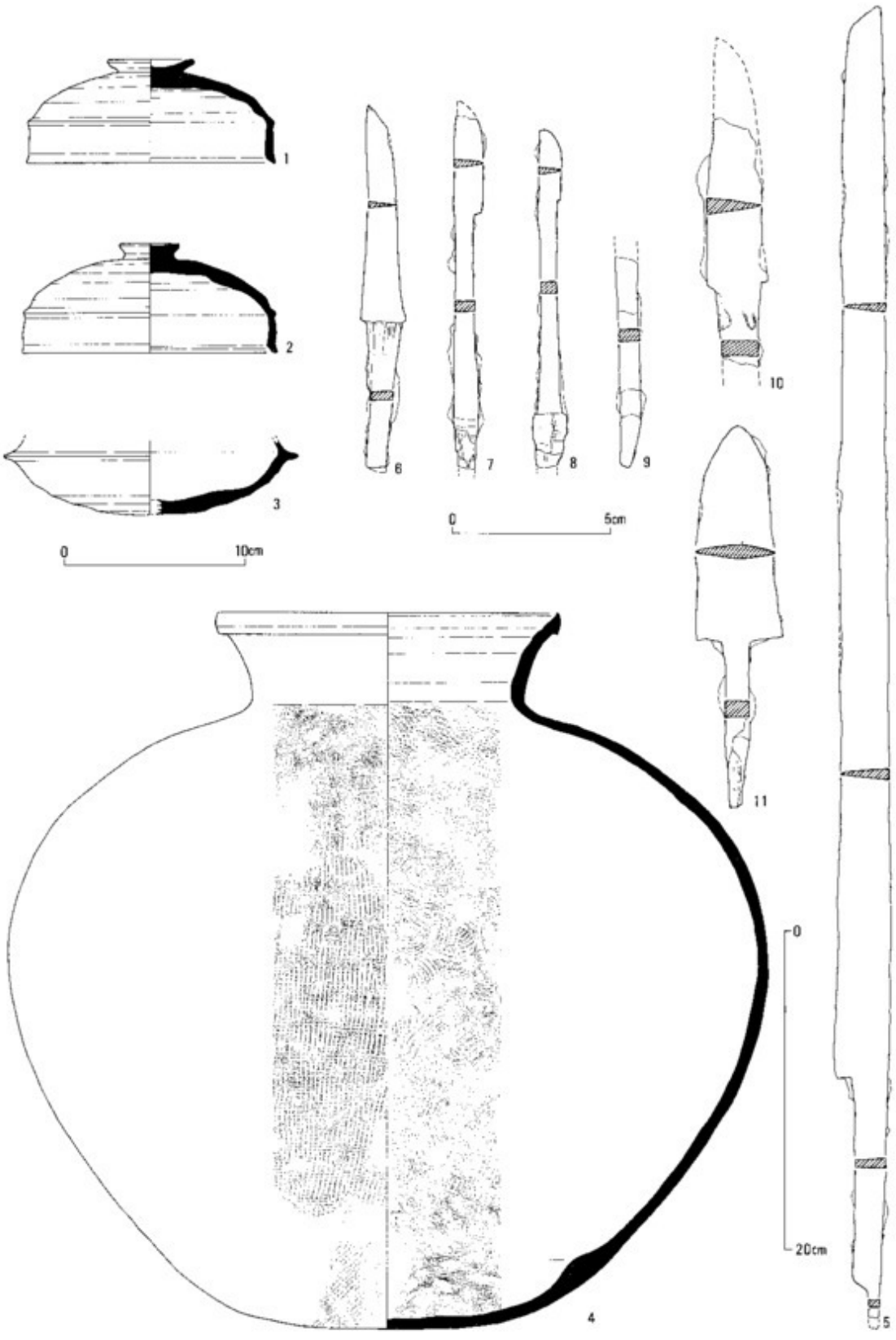
(5) 出土遺物（第10図、第4表）

第1主体から鉄刀1、鉄鏃3、刀子1が出土している。鉄刀（5）は全長84.3cm、刃部幅3.1cmを測り、茎の作りは先端部に段をもつ2段作りで、その先端は欠損している。7－9は鉄鏃で



第8図　8号墳埋葬施設平・断面図（S＝1：30）

第9図　8号墳埋葬施設検出状況（北西から）

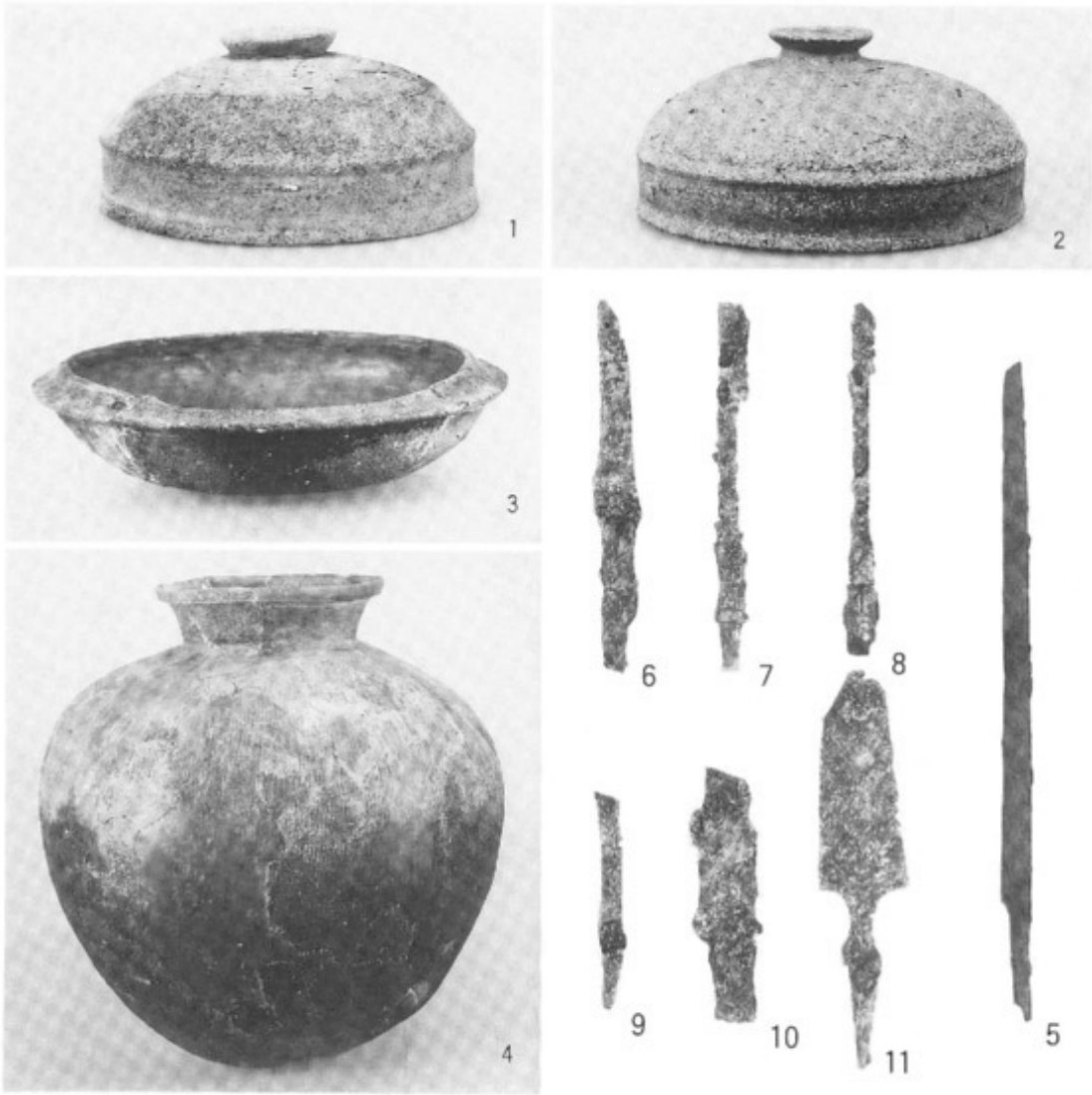


第10図　8号墳出土遺物（1～3…S＝1：3、4・5…S＝1：4、6～11…S＝1：2）

いずれも長頸鏃で刃部は片刃である。8は現長11.7㎝、刃部長2.3㎝、幅0.7㎝を測り、7・8には茎の部分に木質とその上を覆っていた皮状のものが残っている。刀子（6）は全長11.4㎝、刃部長6.7㎝、幅1㎝を測る。茎の部分に木質が残る。

第3主体からは須恵器・有蓋高杯蓋2、刀子1が出土している。有蓋高杯・蓋（1・2）はいずれも口径11.6㎝、器高5～5.3㎝を測り、天井部に中央がややへこんだつまみがついている。刀子（10）は刃部と茎部の両端が欠損し、残長7.7㎝、刃部幅1.7㎝を測り茎部には木質が残る。

その他周溝内及び墳丘斜面から須恵器・甕1、杯身1が出土している。甕（4）は、口径21.3㎝、器高45㎝を測り、口縁端部を上方と下方につまみだしている。胴部内外面には、タタキの痕跡が見られる。杯身（3）は、口縁端部を欠損する。また中心部より西2.7mの斜面部分の盛土内から鉄鏃（11）が単独で出土している。これについては埋葬施設に伴うものか断定できない。11は長茎式で全長13㎝、刃部長6.7㎝、幅2.5㎝を測り茎部には木質が残る。



第11図　8号墳出土遺物

2　門の山９号墳

(1) 立地と調査前の状況

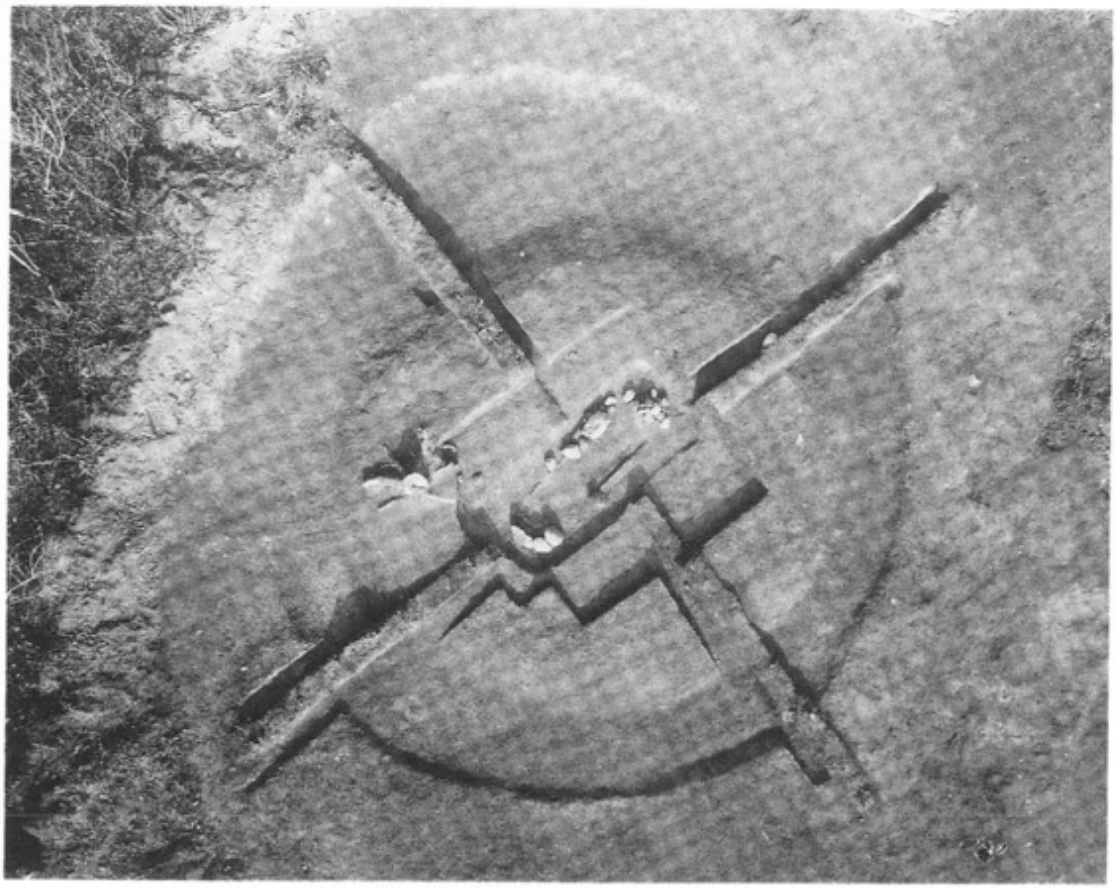
８号墳の北６ｍの丘陵最高所に位置し、周溝がほぼ円形に全周すると考えられた。墳丘内にも目立った乱掘穴は見られないが、現状での墳丘は８号墳ほど高くなく高さは60cmほどである。

(2) 墳丘（第13図）

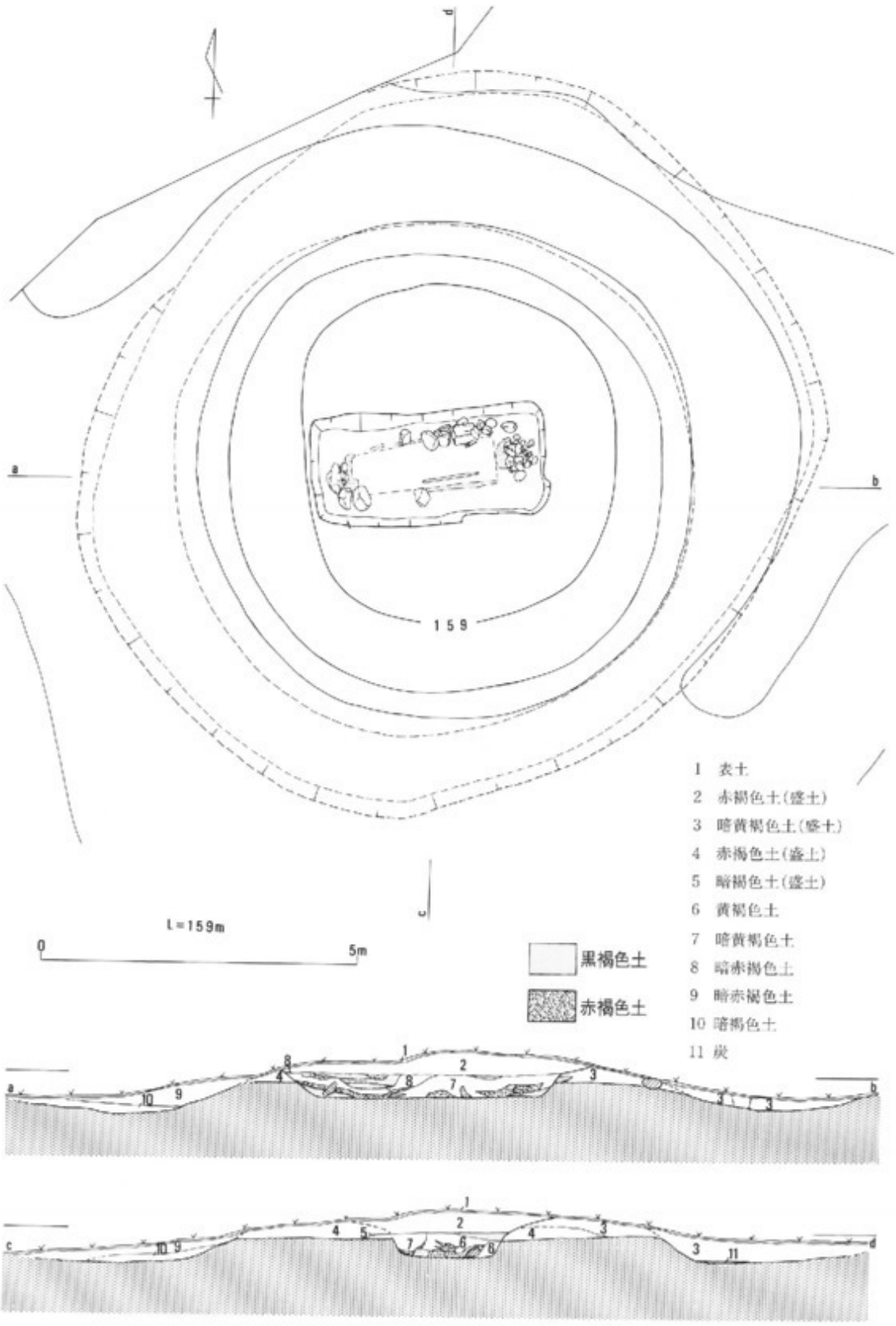
直径8m（周溝を含めると12m）程の円墳でややいびつではあるが周溝はほぼ全周する。高さは、東側で0.88m、西側で1.04mである。墳丘のほぼ中央に木棺が１基存在する。墳丘及び埋葬施設の構築方法は、まず周溝を円形に巡らし墓域を決め、内部の地山面を水平にしその中央部分に埋葬施設の墓壙を掘りこんでいる。この掘り込みと同時に周辺に盛土（第13図３・４）をドーナツ状に積んでいき埋葬が終了と同時にその上部に仕上げの盛土（同２）を行い墳丘の全構築を終了させている。

(3) 周溝（第13図）

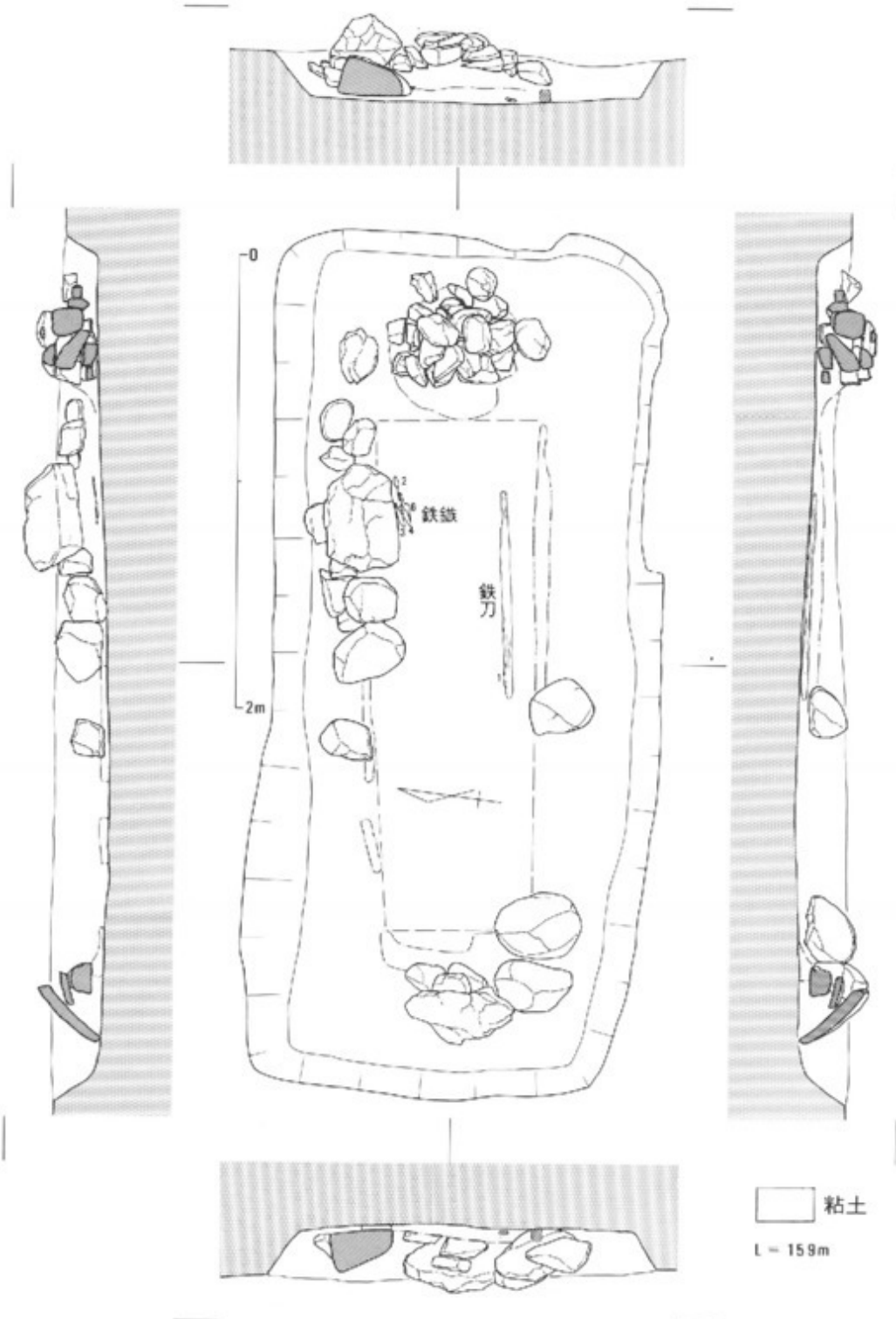
全周し最大幅2.5m、深さ0.6mを測り、西側埋土から須恵器・杯蓋２（第19図７・８）、杯身１（同９）が出土している。



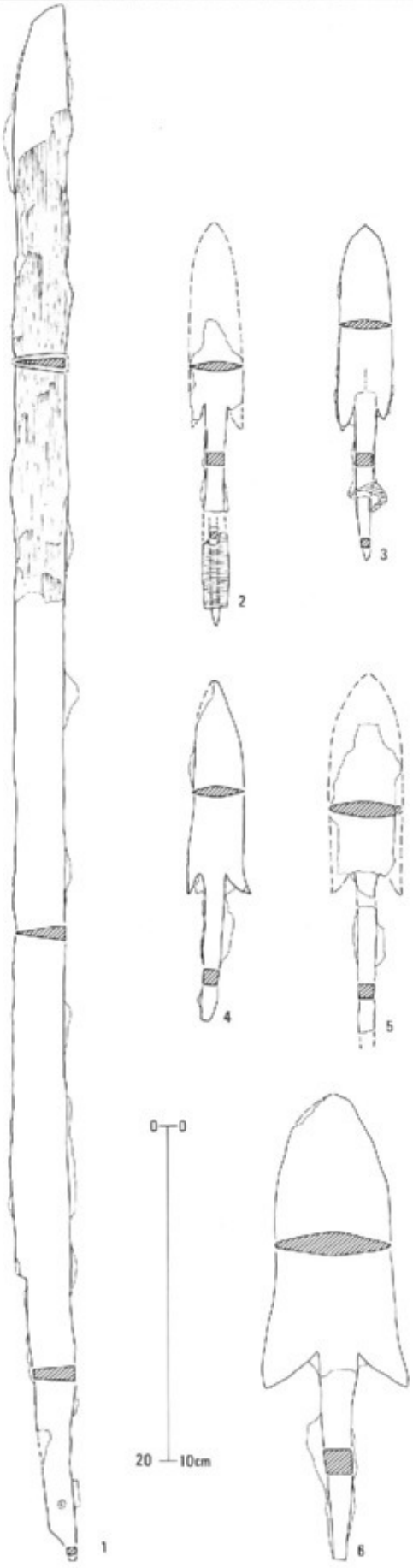
第12図　門の山９号墳全景



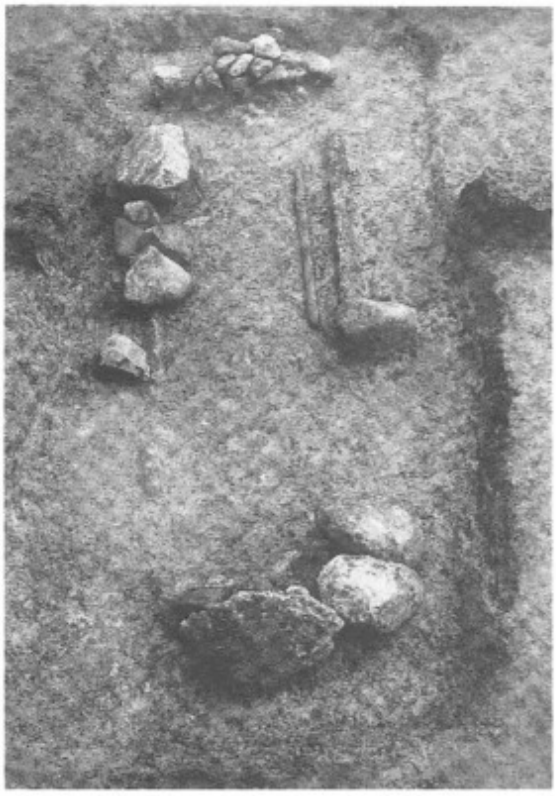
第13図　門の山9号墳平・断面図（S＝1：100）



第14図　9号墳埋葬施設平・断面図（S＝1：30）

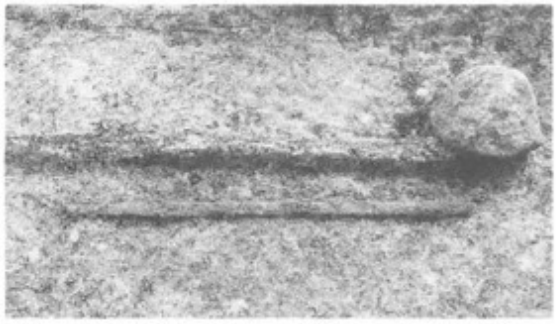


第15図　9号墳埋葬施設出土遺物
（1…S＝1：4、2～6…S＝1：2）



第16図　9号墳埋葬施設（西から）

第17図　9号墳遺物出土状況(1)（南から）



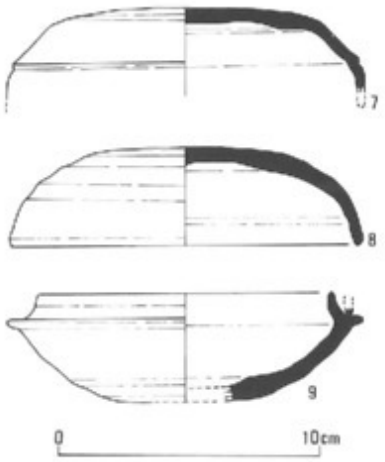
第18図　9号墳遺物出土状況(2)（北から）

(4) 埋葬施設（第14図）

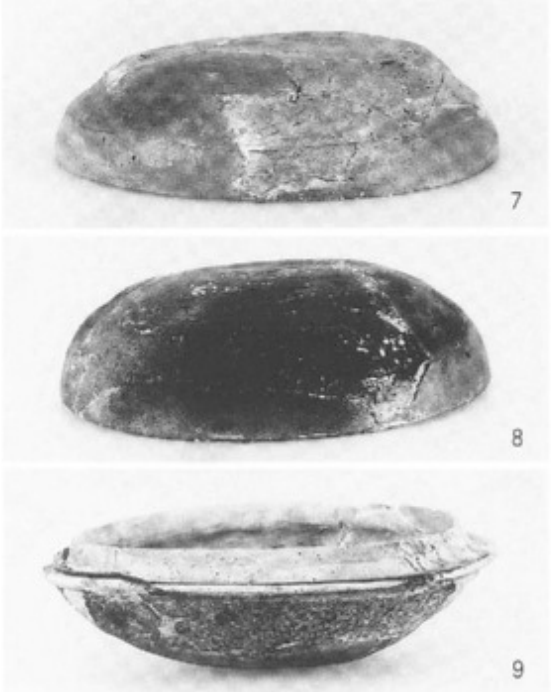
墳丘中央部分に木棺が１基存在する。主軸は尾根線に対し直交しほぼ東西方向を向く。掘方は全長3.8m、幅1.7m、深さ22cmを測る。両小口と側壁部分には粘土と複数の石が存在し、木棺を支えていたことが推察され、鉄釘が発見されていないことから釘を使用しない形式の木棺が考えられる。東小口の石はやや小ぶりで重ねてやや高く山の様に積まれている。これとは対照的に西小口はやや大ぶりの石を使用している。また、同様な石が側壁部分にも見られ、北東側では竪穴式石室の基底石と見間違えるほどのかなりの石を使用している。また粘土は南側壁の部分が残り良く幅6cmを測り、本来は木棺外周に沿ってほぼ全周していたものと考えられる。この粘土と平行する形で鉄刀１（１）が出土している。おそらくこの鉄刀と粘土との隙間の部分が木棺の使用材の厚さを表しているものと考えられ、使用木材の厚さはおよそ９cm程である。北側の小口よりから鉄鏃５（２～６）がまとまって出土している。木棺痕跡は東小口幅0.7m、西小口幅0.63m、長さ2.25mを測り、東側が頭位と考えられる。

(5)出土遺物（第15・19図、第４表）

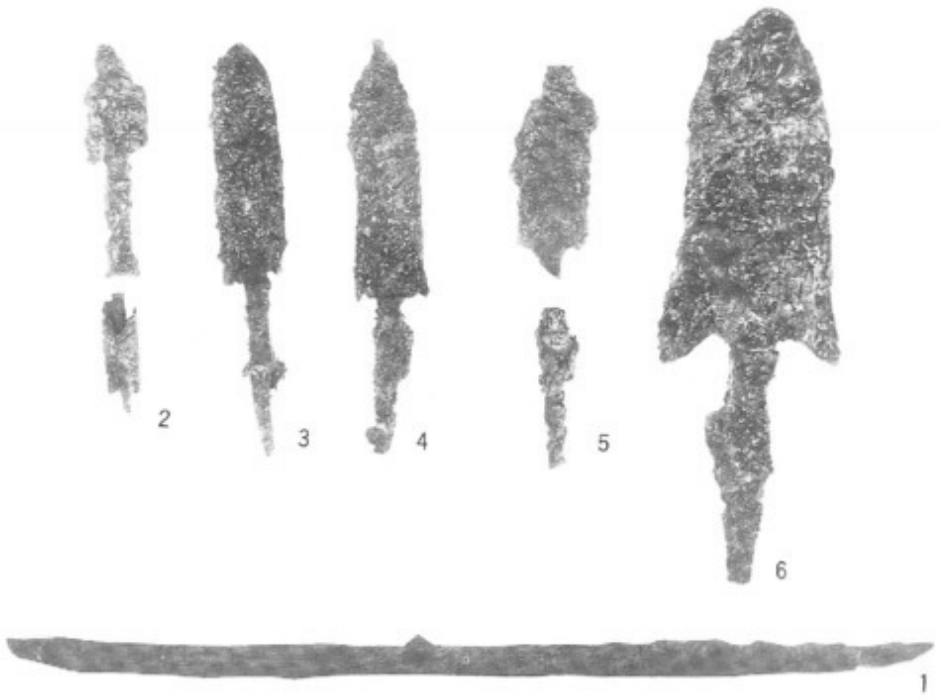
木棺内から鉄刀１、鉄鏃５が出土し（第15図）、鉄刀（１）は、全長95.3cm、刃部幅3cmを測り、茎部は先端が一段細くなって２段の形状である。鉄鏃（２～６）は２～５のような刃部が小型と６のようにやや大型の２タイプがありいずれも長茎式である。３は全長10cm、刃部幅1.56cmを測り、茎部先端には皮状のものが残っている。６は全長14cm、刃部幅3.5cmを測る。周溝内から須恵器・杯蓋２（第19図７・８）・杯身１（９）が出土し、８は口径13cm、器高3.9cmを測り天井部のみ回転ヘラ削りを施している。９は口径11cm、器高4.2cmを測り、受け部に蓋の一部が付着している。



第19図　９号墳周溝内出土遺物（S＝１：３）



第20図　９号墳周溝内出土遺物



第21図　9号墳埋葬施設出土遺物

8号墳

須恵器

（番号は第10図、単位：cm）

番号	器種	口径	器高	ヘラ削り	胎土	焼成	色調	備考
1	有蓋高杯蓋	11.6	5.0	左	1㎜以下の砂粒少量含む	良好	淡青灰色	ほぼ完形
2	〃	11.9	5.3	左	〃	〃	〃	完形
3	杯身		(3.5)	左	〃	〃	青灰色	口縁部欠損
4	甕	21.7	45.0		1㎜以下の砂粒多量含む	〃	淡灰色	肩部に自然釉、底部に回整片が付着

鉄器

（番号は第10図）

番号	器形	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
5	鉄刀	84.4	3.1	0.7	830	茎先端欠損
6	刀子	11.4	1.2	0.3	11	茎に木質
7	鉄鏃	11.2	0.9	0.3	9	茎に木質・皮
8	〃	10.7	0.8	0.3	8	〃
9	〃	6.7	0.7	0.4	3	刃部欠損
10	刀子	7.8	1.8	0.6	19	刃部・茎先端欠損
11	鉄鏃	12.1	2.5	0.5	20	茎に木質

9号墳

須恵器

（番号は第19図、単位：cm）

番号	器種	口径	器高	ヘラ削り	胎土	焼成	色調	備考
7	杯蓋		(3.4)	左	1㎜以下の砂粒少量含む	良好	淡青灰色	口縁端部欠損
8	〃	13.1	3.9	不明	〃	〃	〃	
9	杯身	11.1	4.2	右	0.5㎜以下の砂粒少量含む	〃	〃	蓋の口縁部が付着

鉄器

（番号は第15図）

番号	器形	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
1	鉄刀	95.3	2.9	0.6	1,022	鞘の木質残存
2	鉄鏃	9.2	1.6	0.4	3	刃部先端欠損、茎に皮
3	〃	10.0	1.6	0.4	11	茎に皮
4	〃	10.2	1.5	0.5	11	
5	〃	9.3	2.1	0.5	10	刃部・茎先端欠損
6	〃	14.0	3.5	0.8	58	

第4表　8・9号墳出土遺物観察表

3　門の山14号墳

(1) 立地と調査前の状況

8・9号墳の中央やや東側斜面寄りに立地する。除伐後の現状ではかろうじて墳丘の高まりを確認し、高さも40cmを測るぐらいである。新規に発見された古墳である。

(2) 墳丘（第23図）

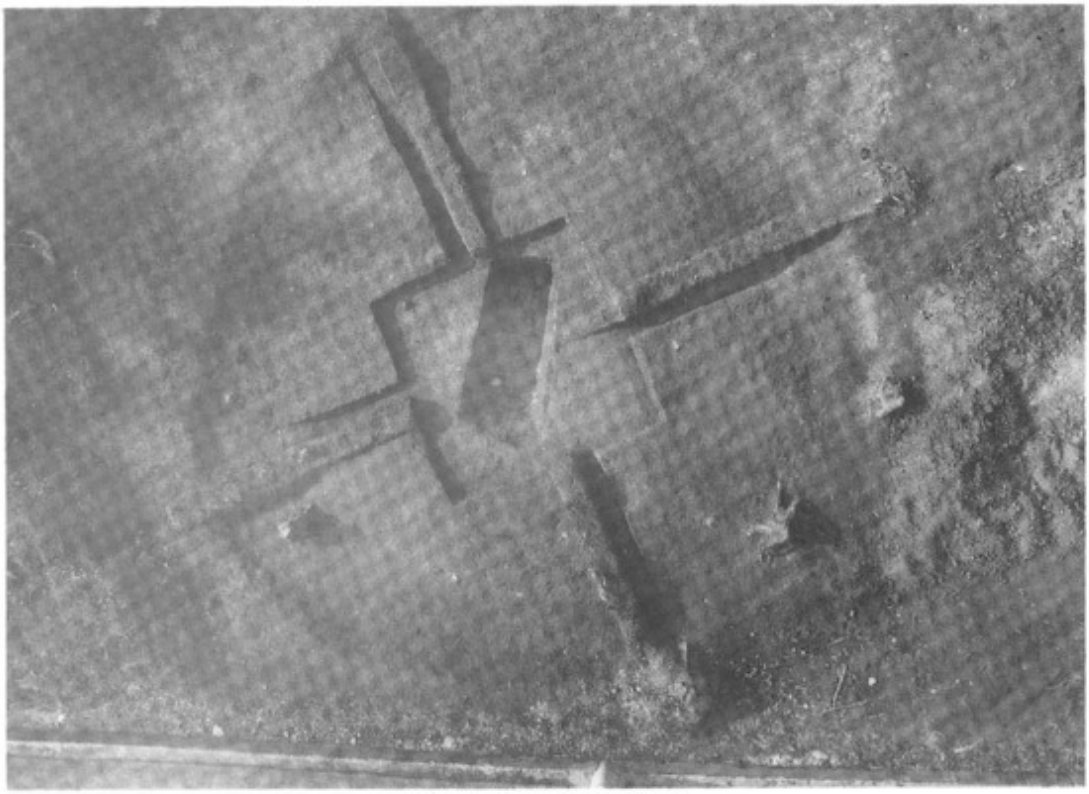
直径6.8m程（周溝を含めると9m）の円墳で斜面に立地するため周溝は山側の部分を中心に巡り、谷側では自然解消している。墳丘の構築方法は9号墳の場合と同様である。盛土は最大30cm、高さは約90cmを測る。盛土内から弥生時代の土器片が少量出土している。

(3) 周溝（第23図）

山側部分を中心に巡り最大幅1.5m、深さ0.6mを測り、断面は緩やかなU字形である。内部からの須恵器・甕の細片が出土している。

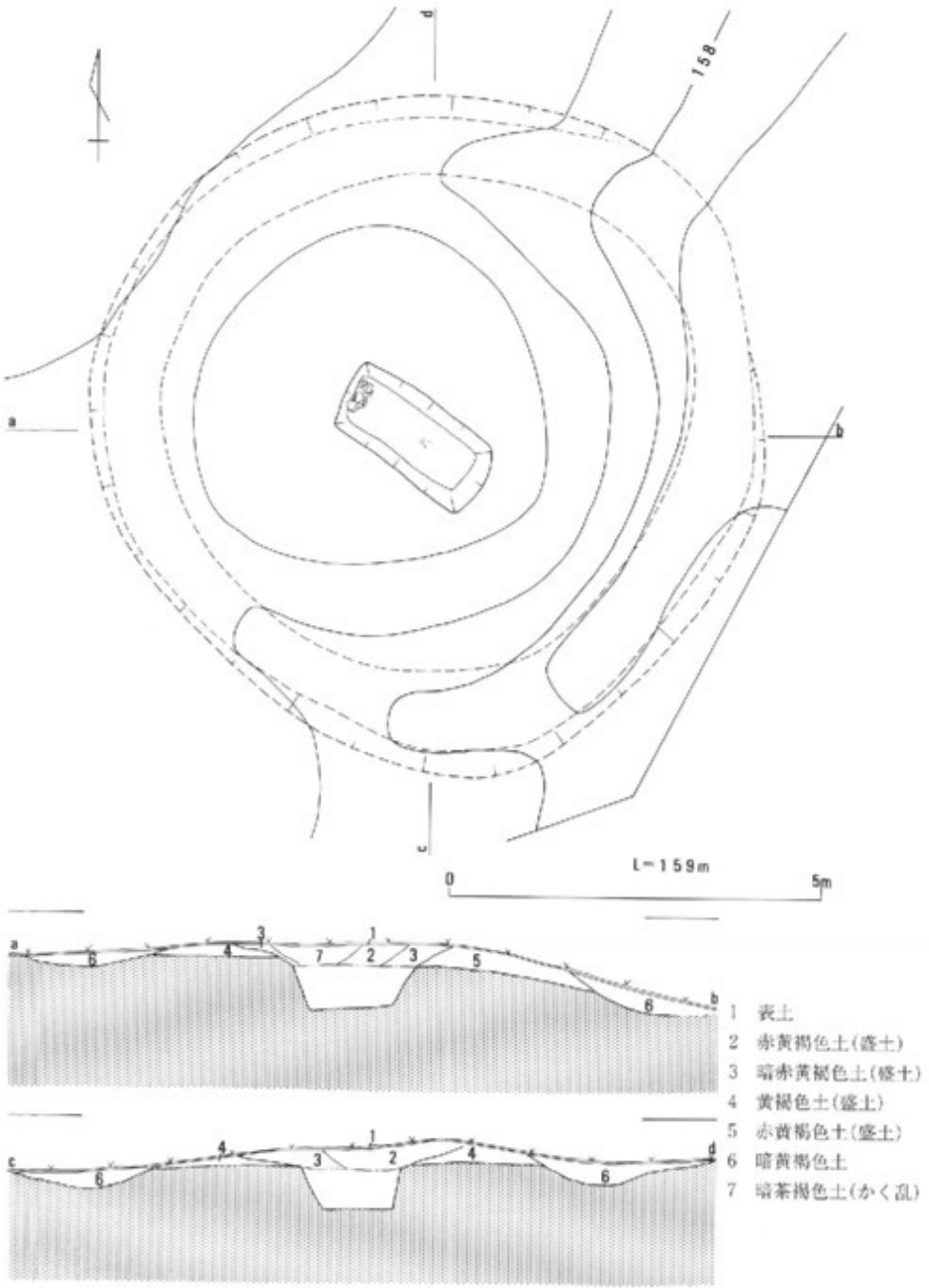
(4) 埋葬施設（第24図）

墳丘のほぼ中央に位置する木棺直葬で、主軸は尾根線に対し斜交し南東方向を向いている。墓壙の堀方は2.3m、幅1mの長方形を呈し、深さは58cmを測る。墓壙の中央やや東よりの所から管玉、小玉、練玉がまとまって出土している。その出土状況からこれら玉類は紐に通され

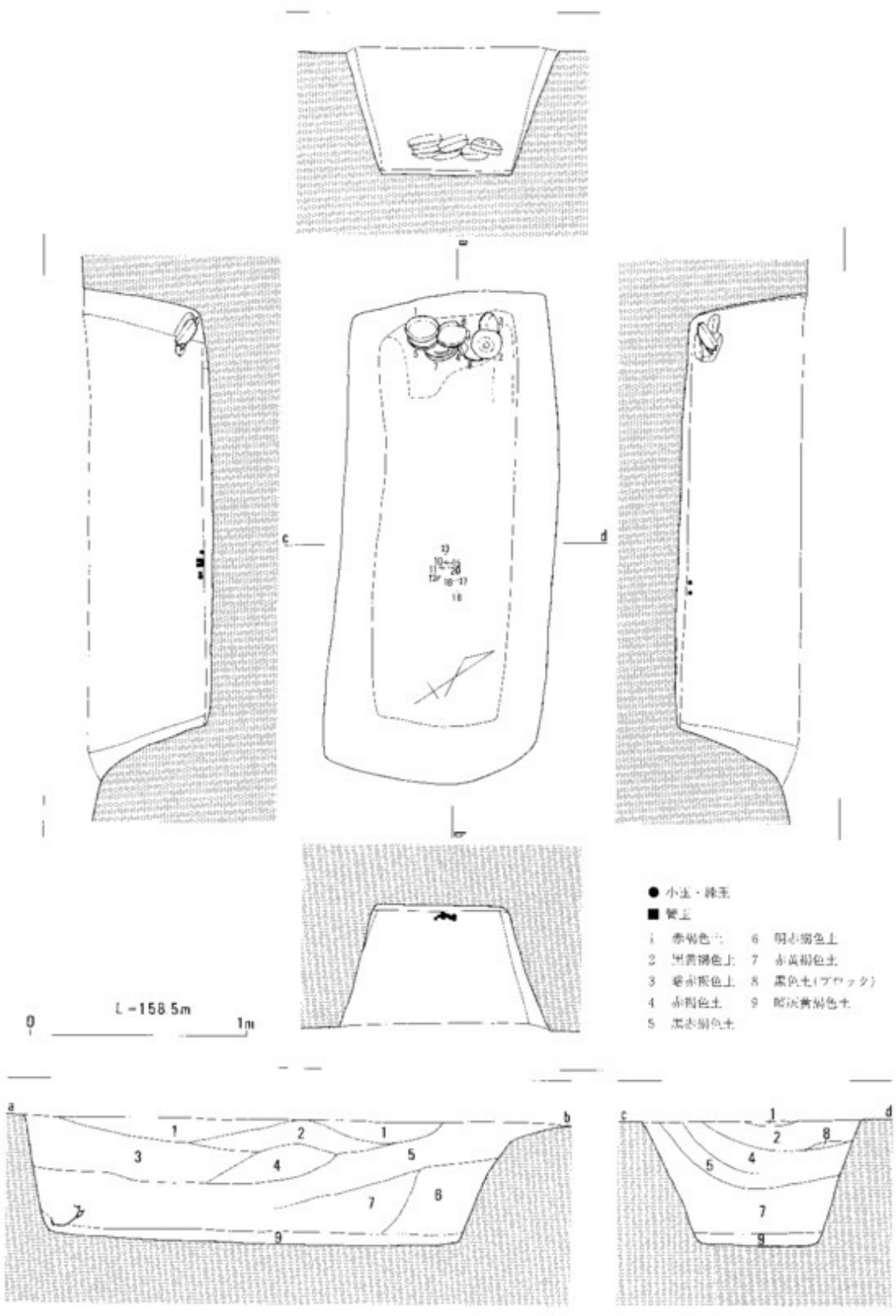


第22図　門の山14号墳全景

一連のものであった可能性が大きく、この部分が胸部に当たり南東側が頭位である。またその反対側の足元と考えられる部分では須恵器・杯がまとまって出土している。さらにこの部分の床面では木棺痕跡が確認され、その構造から木棺は組み合わせ式であったと考えられ、これら須恵器は棺外に置かれていたものである。またこの須恵器・杯は4セットで、セットで組み合わせて副葬されていたのは第28図4・8だけで、その他の蓋の多くは裏を向き身の上に重ねら



第23図　門の山14号墳平・断面図（S＝1：100）

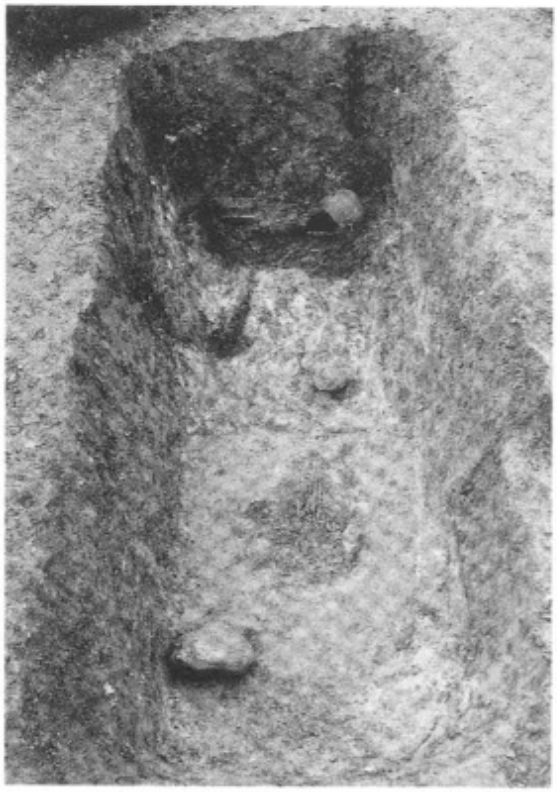


第24図　14号墳埋葬施設平・断面図（S＝1：30）

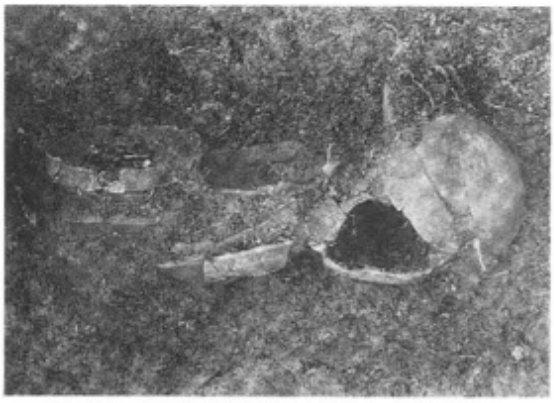
れているものが多い。さらに棺上に置かれていたと考えられる須恵器・杯身1（9）が中央付近から単独で出土している。

(5) 出土遺物（第28図、第5・6表）

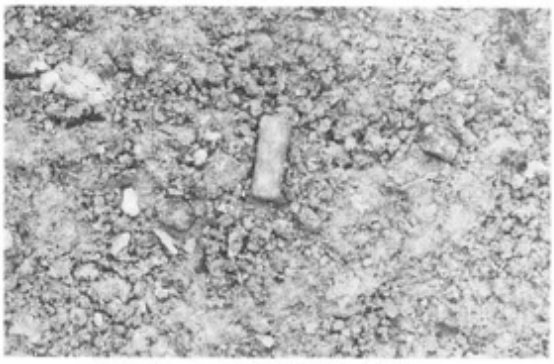
出土遺物としては、木棺内から滑石製管玉2、凝灰岩製管玉1、ガラス製小玉7、土製練玉3、石製小玉1の計14点を図示したが、これ以外にもガラス小玉の破片が数点出土している。このことから玉の実数はさらに増えるものと考えられる。管玉は滑石製（10・11）緑色凝灰岩製（12）があり、小玉はほとんどがガラス製で、内部に気泡が観察できるもの（13・14）がある。玉類の詳細については観察表（第5表）を参照されたい。また、棺外の墓壙内から出土した須恵器はすべて生焼け状を呈しており、非常に薄くもろいものである。1は天井部とのさかいにやや突出した稜が残っている。天井部2分の1程に回転ヘラ削りを施している。5は口縁端部は丸くおさめている。底部3分の1ほどに回転ヘラ削りを施している。須恵器の詳細については観察表（第6表）を参照されたい。墳丘上に供献されていたと考えられる須恵器・甕一個体の破片が斜面部及び周溝内で出土している。いずれも摩滅が著しく小片のため図示できないが、全体的に焼成が不良で胴部外面にタタキ痕が観察される。その他周溝及び盛土内から、弥生時代の土器片が少量出土している。



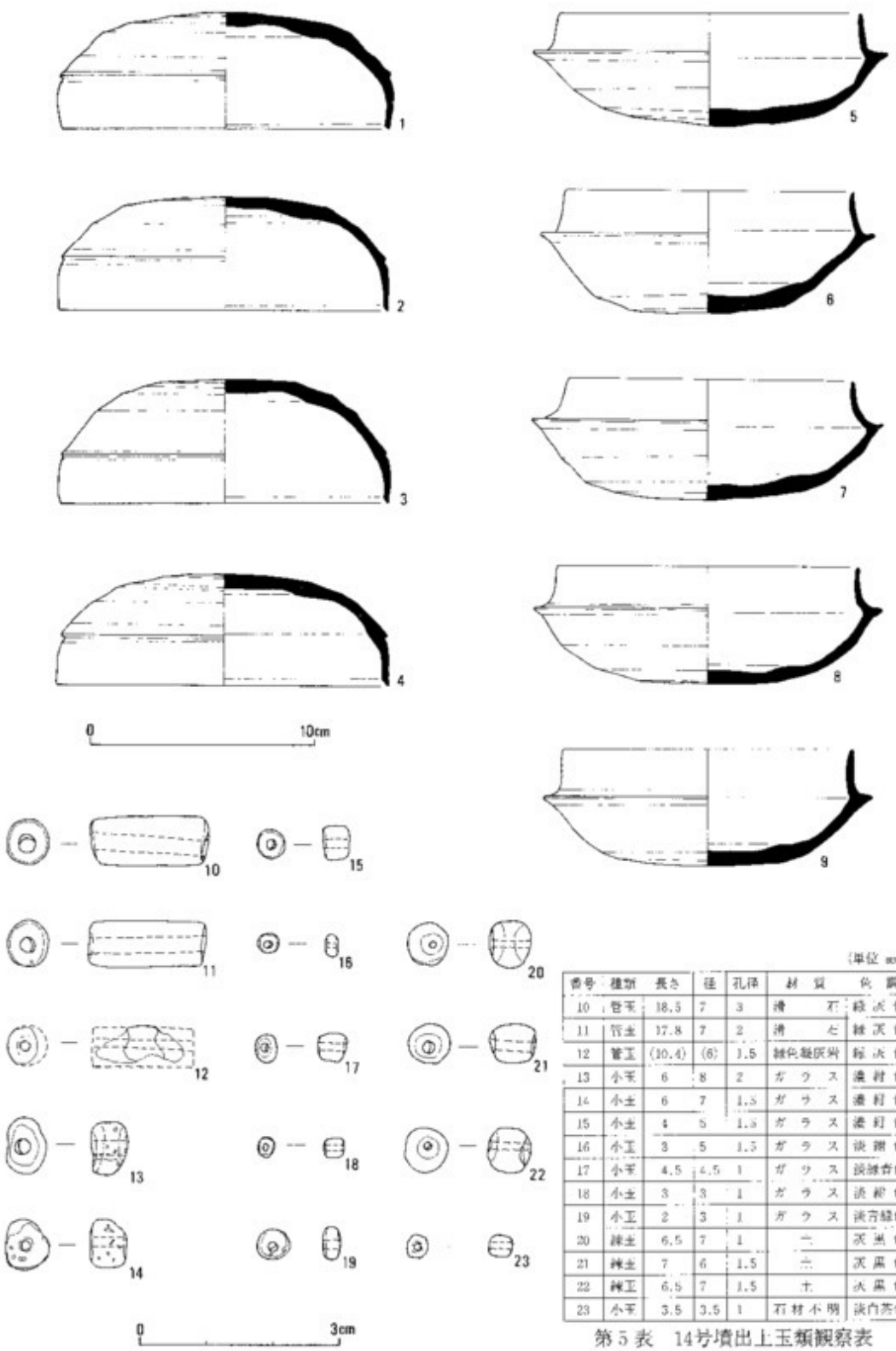
第25図　14号墳埋葬施設（南東から）



第26図　14号墳遺物出土状況(1)（南東から）



第27図　14号墳遺物出土状況(2)

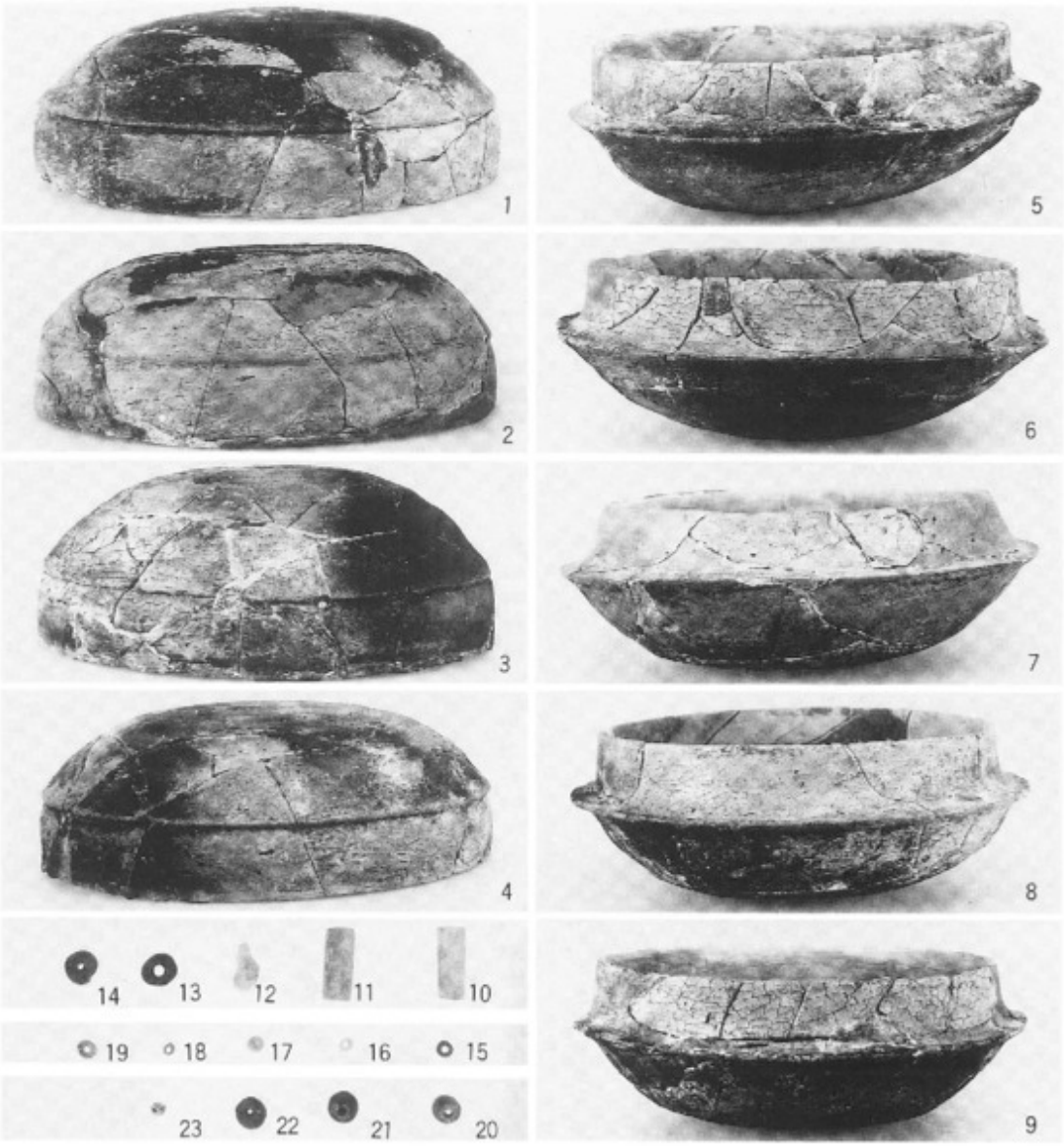


第28図　14号墳埋葬施設出土遺物（1～9…S＝1：3、10～23…S＝1：1）

（単位 cm）

番号	種別	長さ	径	孔径	材質	色調
10	管玉	18.5	7	3	滑石	緑灰色
11	管玉	17.8	7	2	滑石	緑灰色
12	管玉	(10.4)	(6)	1.5	緑色凝灰岩	緑灰色
13	小玉	6	8	2	ガラス	濃紺色
14	小玉	6	7	1.5	ガラス	濃紺色
15	小玉	4	5	1.5	ガラス	濃紺色
16	小玉	3	5	1.5	ガラス	淡紺色
17	小玉	4.5	4.5	1	ガラス	淡紺青色
18	小玉	3	3	1	ガラス	淡紺色
19	小玉	2	3	1	ガラス	淡青緑色
20	練玉	6.5	7	1	土	灰黒色
21	練玉	7	6	1.5	土	灰黒色
22	練玉	6.5	7	1.5	土	灰黒色
23	小玉	3.5	3.5	1	石材不明	淡白茶色

第5表　14号墳出土玉類観察表



第29図　14号墳埋葬施設出土遺物

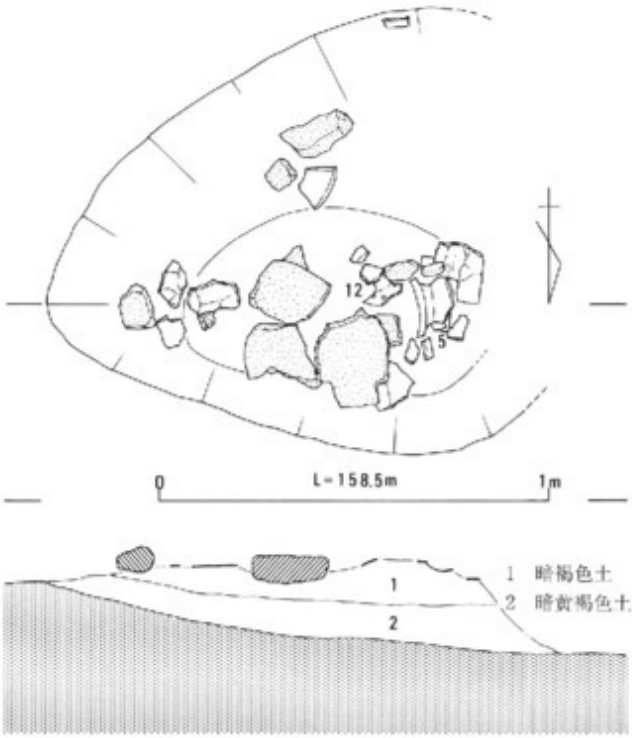
須　恵　器　　（番号は第28図、単位：cm）

番号	器種	口径	器高	ヘラ削り	胎　　土	焼成	色　調	備　　考
1	杯蓋	14.6	5.2	左	1㎜以下の砂粒少量含む	不良	淡 橙 色	生焼け状
2	〃	14.6	5.1	左	緻密で少量の砂粒含む	〃	橙 灰 色	〃
3	〃	14.6	5.7	左	0.5㎜以下の砂粒少量含む	〃	〃	〃
4	〃	14.8	5.1	左	〃	〃	淡橙灰色	〃　8とセット
5	杯身	13.4	5.1	不明	1㎜以下の砂粒少量含む	〃	淡橙灰色	〃
6	〃	13.0	5.5	左	〃	〃	橙 灰 色	〃
7	〃	12.7	5.4	左	0.5㎜以下の砂粒少量含む	〃	淡茶灰色	〃
8	〃	13.4	5.3	左	〃	〃	淡橙灰色	〃
9	〃	13.0	5.3	不明	緻密で少量砂粒含む	〃	〃	〃

第6表　14号墳出土須恵器観察表

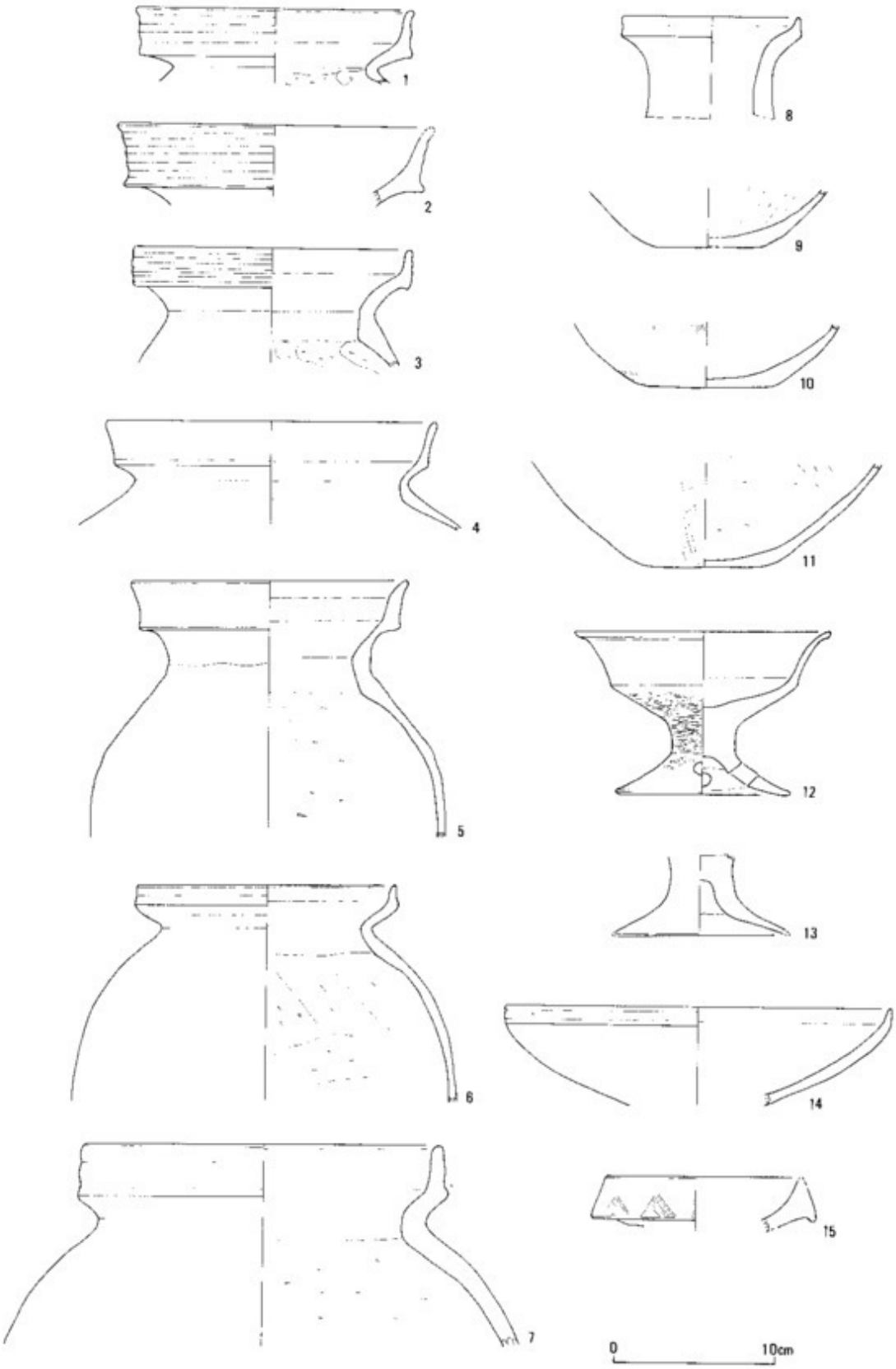
4　その他の遺構・遺物（第30～32図）

その他の遺構として8号墳の旧表土面から弥生時代の土壙を検出している（第30図）。土壙は西半分が古墳の周溝によって切られ、上部もかなり削平されているものと考えられる。現状で全長1.1m、幅1.1mの角の尖った楕円形を呈する。深さは0.2mを測り、埋土は2層で出土遺物の多くは上層から出土している。出土遺物は弥生土器と20cmほどの平らな石数個などであり、その性格については明確でない。弥生土器（第32図）は、ほとんどが小片となっており完形に復元できたのは12ぐらいである。図示した以外にも壺・甕など個体数はさらに増えるものと考えられる。1～7は口縁部が垂直に立ち上がる甕ないしは壺である。1～3は口縁部外面に3～4条の凹線文を施し、その他はヨコナデで仕上げている。2・5のように口縁端部がやや外反するものもある。胴部の外面調整は、摩滅しているものが多く、残存しているものではタテハケが観察される。内面はヘラ削りである。8は頸部がやや垂直に立ち上がり外反させ口縁部で垂直につまみ上げる壺である。9～11は甕ないしは壺の底部で外面にハケやヘラ磨きの痕跡が観察される。12・13は高杯で、12は短脚に4方向の円形透かしがあり、杯部はくの字に屈曲し口縁部はやや外反している。外面の杯部下半から脚部にかけて細かいヘラ磨きを施している。14は高杯の杯部ないしは鉢状の土器であろう。内外面とも摩滅が著しい。15は器台の口縁部である。外面に鋸歯文を施している。以上の土器は、弥生時代後期を5期に分けた、津山市大田十二社4式（註1）に類例が見られ、概ね弥生時代後期の後葉から終末頃の



第30図　土壙平・断面図（S＝1：20）

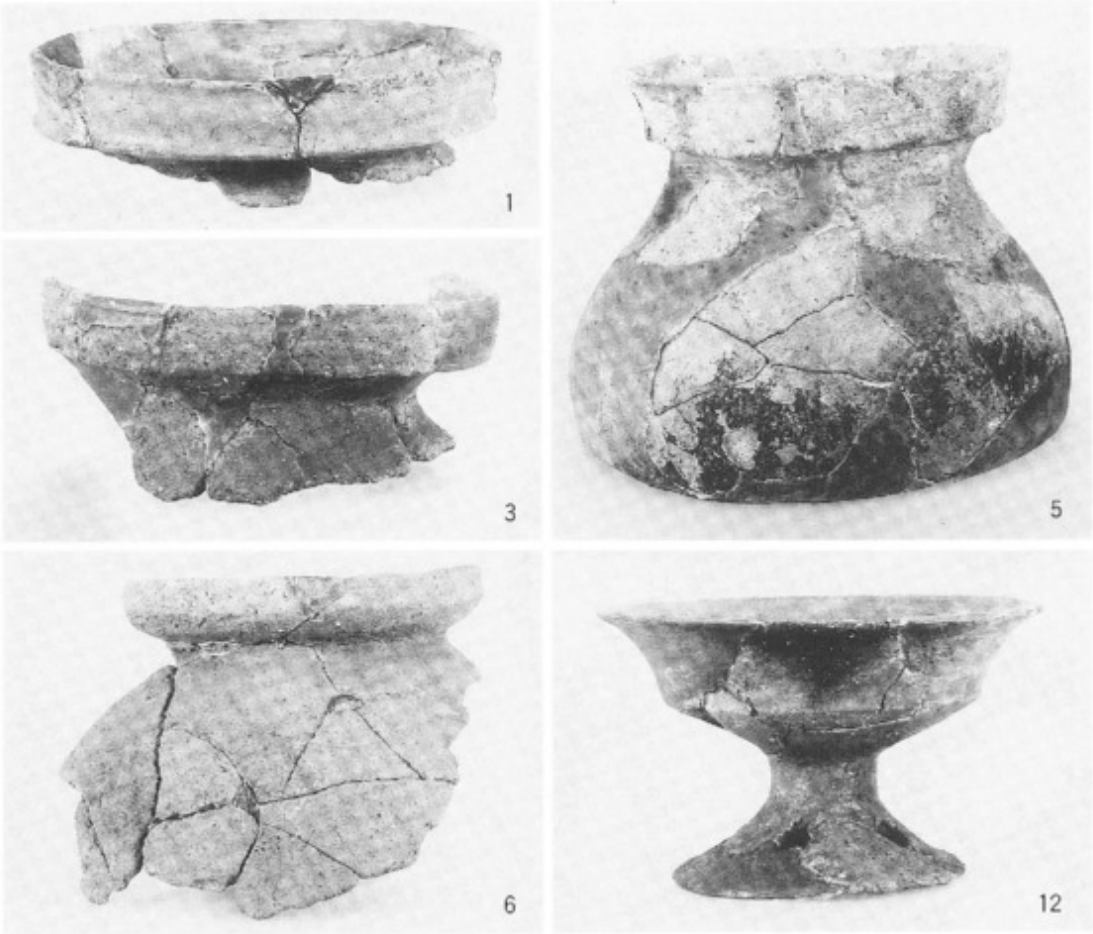
第31図　土壙遺物出土状況（南から）



第32図　土壙出土遺物（S＝1：4）

所産と考えられる。

（註１）中山俊紀他「大田十二社遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集』津山市教育委員会　1981年



第33図　土壙出土遺物

番号	器種	口径	器高	胎　土	色　調	調　整
1	甕	17.0	(4.5)	2㎜以下の砂粒含む	橙　色	口縁部ヨコナデ、胴部内面ヘラ削り
2	〃？	(19.8)	(5.0)	〃	淡橙灰色	〃　、
3	〃	(17.0)	(7.2)	〃	淡茶橙色	〃　、　〃
4	〃	(20.0)	(6.7)	〃	淡橙灰色	〃　、　〃
5	壺	17.0	(11.0)	〃	淡黄灰色	〃　、　〃　、外面ハケ？
6	甕	(16.0)	(13.4)	〃	淡 橙 色	〃　、　〃
7	甕	(22.0)	(12.5)	〃	淡橙灰色	〃　、　〃
8	壺	(11.0)	(6.4)	〃	〃	〃　、
9	甕or壺			〃	淡橙赤色	内面ヘラ削り
10	〃			〃	〃	〃　、外面ハケ
11	〃			〃	淡茶灰色	〃　、外面ヘラ磨き？
12	高杯	15.8	10.2	〃	赤 褐 色	外面ヘラ磨き・赤色顔料を塗布、脚部円孔４個
13	〃		(5.0)	緻密である	橙 灰 色	表面剥落のため不明
14	高杯？	(24.0)	(6.0)	2㎜以下の砂粒含む	淡 橙 色	〃
15	器台	(13.0)	(3.1)	〃	淡橙灰色	口縁外面に鋸歯文

第７表　土壙出土弥生土器観察表

Ⅳ　ま　と　め

1　門の山古墳群の群構成と築造時期について

門の山古墳群は約18基の古墳からなるが、周辺に寺山古墳群８基、煙硝庫付近古墳群８基などの小支群が隣接して存在し（第１・２図）、それらを含めるとかなり大規模な群構成が考えられ、今回の分布調査の結果から低墳丘の古墳の実数はさらに増える事が予想される。この中には時期の違うものも含まれているが、大きく二時期に分けられる。それは、本地域における横穴式石室導入前の段階と導入後の段階である。今回調査した門の山古墳群３基中、８・14号墳は明らかに前者に含まれるものである。また、後者に含まれるものとして寺山古墳群内で数基が確認されている。そしてこの両者が継続的なものなのか、はたまた両者の間に断絶の時期があるのかは、非常に興味深いところである。以下、これらの問題を検討するにあたって門の山古墳群とその周辺古墳群を含めた地域で墳形、埋葬施設、出土遺物などを検討し本古墳群の群構成並びに築造時期を考察し、横穴式石室墳出現への社会的背景の一端を考えてみたい。

門の山古墳群（第３表）

門の山古墳群約18基の内、今回の調査を含め６基の古墳（１・８・９・12・13・14号墳）が調査されている。１号墳以外はいずれも直径10m前後の円墳である。１号墳は葺石を伴う５角形状を呈する墳丘上に、箱式石棺３基がありいずれからも出土遺物は皆無であるため所属時期は不明である（註１）。今回調査の８号墳は明瞭な埋葬施設は検出していないが、少なくとも木棺複数が存在していたと考えられる。埋葬施設の一つから鉄刀、鉄鏃、刀子がまた一方では須恵器・有蓋高杯蓋、刀子が、周溝内からも須恵器・杯身・甕が出土している。９号墳は木棺の棺内から鉄刀、鉄鏃が出土しただけで須恵器を伴わない。そのかわりに周溝内から須恵器・杯が出土している。この場合その須恵器の時期を即この古墳築造時期に当てはめるのはやや早急な感もあり時期決定には慎重を要する。12号墳では南側の竪穴式石槨から須恵器と鉄鏃が、北側の竪穴式石槨から須恵器のみが出土している（第40・41図参照）。13号墳はかなりの削平を受けており、横穴式石室の可能性のある石積みが検出され、須恵器が出土している（註２）。14号墳は木棺で棺内から玉（管玉、小玉、練玉）、棺外から須恵器・杯が出土している。

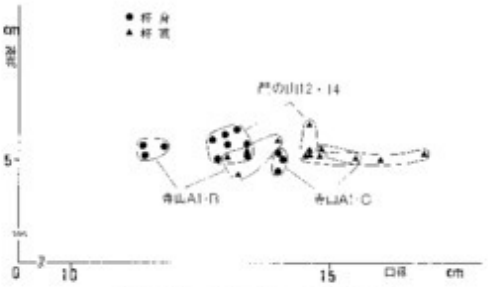
寺山古墳群（第３表）

約11基の古墳群中規模や埋葬施設から３群に分けられる。その内出土遺物などが知られているのはＡ１・３号墳のみであり、しかもＡ１号墳は工事後による聞き取り調査のため詳細は不明である。調査報告によると直径14.6mの円墳で内部には３基の竪穴式石槨が存在し、Ａ石槨からは石製紡錘車が、Ｂ石槨からは須恵器、Ｃ石槨からは須恵器、玉（勾玉、管玉）、鉄鏃が出土している。Ａ３号墳は竪穴式石槨と考えられる埋葬施設内から須恵器・杯が採集されてい

る（註３）。また本古墳群は４号墳が直径20mで最大規模を測り、６号墳の様に横穴式石室を埋葬施設に持つものと、７～９・11号墳の様にその位置や規模から門の山古墳群の一群内に含めた方が良いものなどがある。

以上、類例は少ないが須恵器を伴なう小規模古墳はいずれも円墳であるものの、規模、埋葬、施設、出土遺物の組成などの面で大きく異なっている。同一古墳群内でこのように組成などが大きく異なる原因が何に起因するのか（時期的、階層的など）まず出土須恵器から時期を検討する事とする。なおこの場合の須恵器は生産地ではなく消費地での使用であることは、時期決定を行うにあたっては十分考慮せねばならない問題ではある。

門の山古墳群から出土した須恵器は杯、無蓋高杯、甕、台付き壺などの組成で構成されている。その内よく編年に利用されている杯をまず見てみよう。第34図に法量図がある。これによると門の山12・14号墳の杯はほぼ同一規格のものと言える。この特徴は、杯蓋が口径14.6～15.6cm、器高4.5～5.7cm、天井部との境にやや突出した稜をもつ。身は口径12.7～13.4cm、器高5.0～5.6cm、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり端部は丸くおさめている。次にこれら単次葬ではない複次葬の寺山Ａ１号墳をみてみると、３基の竪穴式石槨の内須恵器の出土したＢ・Ｃ石槨の杯の法量は、大きく異なっている（第34図）。さらに細かく見るとＢ石槨では身の口縁端部が面をもつものと丸くおさめるものの２種類が存在し、Ｃ石槨では身の口縁端部はすべて丸くおさめており、後者は先の門の山の一群と同一規格のものと考えられるが、全体的に口径は一回り大きくなっている。また、この寺山Ａ１号の報告者はこれら須恵器の様相からＢ石槨→Ｃ石槨への変遷を考えている。この考えに従い杯身のみに関して言えば、口径11～12cmで端部に面をもつものと丸くおさめるものとの共存から、口径がやや大きくなり13～14cm前後で端部がすべて丸くおさめるものへと変遷した事が伺える。ただ前者の場合このように細部の形態が異なる原因が時期的なものか、工人の違いによるものかは即断はできない。これについては次項で考えてみたい。いずれにせよ、寺山Ａ１号墳Ｂ石槨がやや先行して築かれ、次に同Ｃ石槨と門の山12・14号墳が築かれた事が考えられる。さらに今回調査した３基の内埋葬施設がはっきりしなかった８号墳は、埋葬施設から出土した須恵器は有蓋高杯・蓋だけではあるが、その特徴から３基中では一番古相に属すると考えられ、先の寺山Ａ１号墳Ｂ石槨よりは先行するものの同墳Ａ石槨の須恵器が不明であるため、これとほぼ同時期の可能性も考えられる。この場合寺山Ａ１号墳は直径14.5m、高さ３mと古墳群中では突出した規模を誇り、門の山８号墳は、直径9.5m、高さ1.3mで寺山Ａ１号墳よりは一回り小さな規模である。一方門の山12・14号墳はいずれも直径10m以下、高さも1.5m以下とさらに小規模で



第34図　須恵器・杯法量図

ある事から、門の山12号墳が築かれた時点では寺山Ａ１号などの直径15m前後でかなりの高さをもつ古墳（この場合は前段階の墳丘を利用した追葬ではあるが）と門の山12号墳のような低墳丘の古墳との間には、いわゆる階層的とも言える様な差異があらゆる面で生じている事が考えられる。これら規模からのみ考え門の山古墳群18基中、墳形の異なる１号墳を除く円墳17基を分類してみると、門の山８号墳タイプ（直径10m前後）６基、門の山14号タイプ（直径７m前後）11基であり圧倒的に後者が多い事からも、当時のヒエラルヒーの一端を伺え知ることができる。そしてこの時期になるとこれら低墳丘の古墳の実数がかなり増大しその後、同一空間内に複数埋葬を可能とする家族墓的様相の強い横穴式石室が導入されていく。このような過渡期の社会的背景は何に起因するのかは、墳墓のみならず集落構造、須恵器・鉄などの手工業生産技術の発達など様々な要因を総合的に考えていかねばならない問題ではある。ただ今回は墳墓に関してのみではあるが、このように墳形・規模・埋葬施設・副葬品などの要因の違いをより細かく整理分析していけば、さまざまに入り組んだ当時の社会構造の一端が浮かび上がってくるであろう。

最後にこれら古墳群の時期を考えてみたい。先般来述べているように須恵器の杯に関して言えば、新しくなるにつれ口径が大きくなる事、杯身の口縁端部が面をもつものと丸くなるものの共存からすべて丸くおさめるものへと変遷する２つの特徴が考えられる。似た類例として、津山市・長畝山北古墳群がある（註４）。本古墳群は10数基の古墳で構成され、その多くは追葬を含め陶邑編年（註５）のTK23～47の範疇に収まるものであるが、３号墳第２主体のみやや新しい様相を含んだ杯身が追葬されている。これは寺山Ａ１号Ｂ石槨の口縁端部を丸くおさめているのとほぼ同型である。長畝山北古墳群の報告者は、これら明らかに細部形態が違う杯身を伴う事と追葬がさほど時間がたたないうちに行われている可能性を考えあわせ、これら時期を次のMT－15に対応させている。しかしこれら杯の形態は、一般的な陶邑のそれに比べると大きく異なっている。この事は、この時期に須恵器の需要にあわせ地方窯がかなり確立され、本古墳群周辺地域で個性のある須恵器をかなり生産し始めた事が大きく起因しているものと考えられる。このようにこの時期になると陶邑的様相と在地的様相の強いものとが現れ、中にはこの両者を副葬している場合もある（註６）。この場合この両者の違いを時期的な違いと解釈しがちであるが、このように例えば中央と在地との様相の違いつまり工人の違い（地域差）の場合も考えられ、一概に時期的な違いと解釈してしまうのは早急である。そのためには周辺地域でこの時期の須恵器窯が発見される事を大いに期待したい。以上から須恵器全般を整理し本古墳群の時期を推察してみると、寺山Ａ１号Ｂ石槨に先行すると考えられる門の山８号墳はTK47並行に、そして長畝山北５号墳第２主体とほぼ同形態の杯身が出土している寺山Ａ１号Ｂ石槨がMT－15並行、同Ｃ石槨と門の山12・14号墳がTK－10に並行すると考えられ、このようにMT－15以後は地方窯の発達によりかなり個性的な製品が多く作られるようになってきて

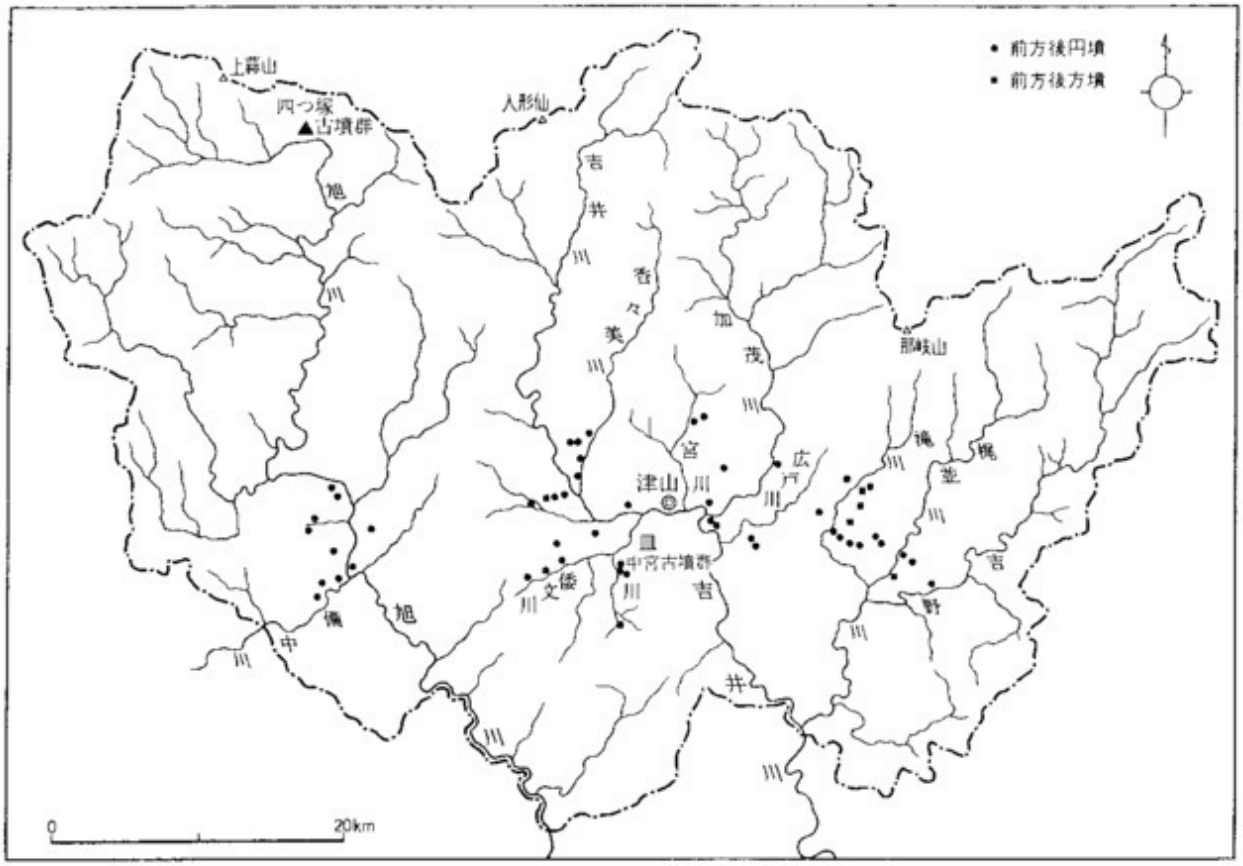
おり、特に14号墳出土の杯身は口径が大きく口縁の立ち上がりが器高の4割程あり、ほぼ垂直に立ち上がり端部を丸くおさめる特徴をもっている。そして、このようなタイプの須恵器・杯身がある程度美作地域で普遍的に見られる事から、これはこの時期の美作地方の一つの地域色と言えよう。須恵器の詳細な変遷及び時期に関しては次項でまとめたい。

2　美作における横穴式石室導入前の群集墳について

美作地方における群集墳の研究は『佐良山古墳群の研究』（註1）に代表されるように、後期古墳それも横穴式石室導入後の盛行期を中心としたものが多い。確かにこの時期の横穴式石室には美作地方特有の陶棺が埋葬される事や鉄滓が供献される事から、その被葬者をめぐり多くの議論がなされ易く、例えばこの鉄滓が供献される事象からその被葬者像を鉄生産と関連させるものもある（註7）。また、導入前段階としては円墳で木棺直葬、竪穴式石槨、箱式石棺などが埋葬施設として使用され、数基ないしは百基近くで群集する事が知られている。このように「群集墳」と一言で言っても横穴式石室導入の前後では葬制（埋葬方法）のみならず社会的背景が大きく変化しているような様相が見受けられ、そのためこの導入前後でこれら群集墳の本質は、大きく異なるものとして捉え両者を呼び分ける場合がある。導入前段階として「初期群集墳」、「古式群集墳」（註8）などと呼称する場合がそれである。本地域におけるこのような群集墳を中心とした論巧としては今井堯・近藤義郎両氏の「群集墳の盛行」が先駆的でありその中で、このような前段階の群集墳を「形成期の群集墳」と位置付け、導入後の「盛行期の群集墳」の中には軍事面を軸とした階層・階級差による身分秩序が形成されているとしている（註9）。このように両者の群集墳には群構成や埋葬施設の構造面さらにはその背景となった社会構造など様々な要因が存在し、厳密に定義するのは困難であろう。その中で横穴式石室導入後の群集墳のみをそれ以前の群集墳と区別するため定義を試みたものもある（註10）。

近年、美作地方においてこの横穴式石室導入前段階、いわゆる群集墳形成期の資料がかなり蓄積されてきている。その群集墳の様相を見る限り、この導入前後で同一の地域に群集墳を形成しているのは、最初に導入を行った地域のみでその他の地域においては両者は別々の群集墳を形成している場合が大半である。そのような事例から、両者は本質的には分けられる可能性が大きく、この前後において明らかに異なる群集を形成している事から、ここでは本地域における横穴式石室導入を一つのメルクマールとして区別し、これら群集墳を「導入前の群集墳」と「導入後の群集墳」と仮称して以下述べていきたい。なおこの導入後においても横穴式石室を採用しない群集墳もみられ（註11）、この言葉が厳密な区別を意味するものではない事は事実であり、その意味では今後群集墳の群構造などが明らかとなれば、再考せねばならない余地を十分残している。

今回は美作地方特に津山市周辺の吉井川支流域を中心に、これら群集墳の様相を検討・分析



第35図　美作地方首長墳分布図

(安川豊史「美作」『前方後円墳集成中国・四国編』山川出版社 1991年より引用一部改変)

し、今後の資料蓄積の糧としたい。近年発掘された資料を吉井川の支流ごとに整理すると皿川、広戸川、加茂川、香々美川、梶並川流域などの小グループに分けられる（第35図参照）。まずこれら小地域の群集墳がどのように展開・変遷し、どのような相互関係があるのか、個々の様相を検討してみたい。それに先立ちその変遷基準となる須恵器の変遷を試みる。この場合、美作の須恵器窯の実態が明確でない現時点では、取り敢えず一時期に一括に副葬された須恵器の組成を重視して変遷を試みてみた。そして基本的には単葬の可能性が大きい木棺などに副葬される須恵器の組成を重視し、生産地でなく消費地での組成で試みるため、当然新旧のものが含まれている可能性が十分考えられるが、この点に関しては新様相の組成を重視した組成で取り扱う事を前提としている。

(1) 美作における横穴式石室導入前の副葬・供献須恵器の変遷

美作地方における横穴式石室導入前段階の古墳出土須恵器の組成を中心に、その変遷を行ったのが第36図である。大きく6期に分けられる。なおここにあげた各期の組成がすべての埋葬施設に見られるわけではなく、当然同一期においても墳形・規模・埋葬施設などが異なれば、組成の違いはみられる。まず各器種ごとにその変遷について簡単に述べてみたい。

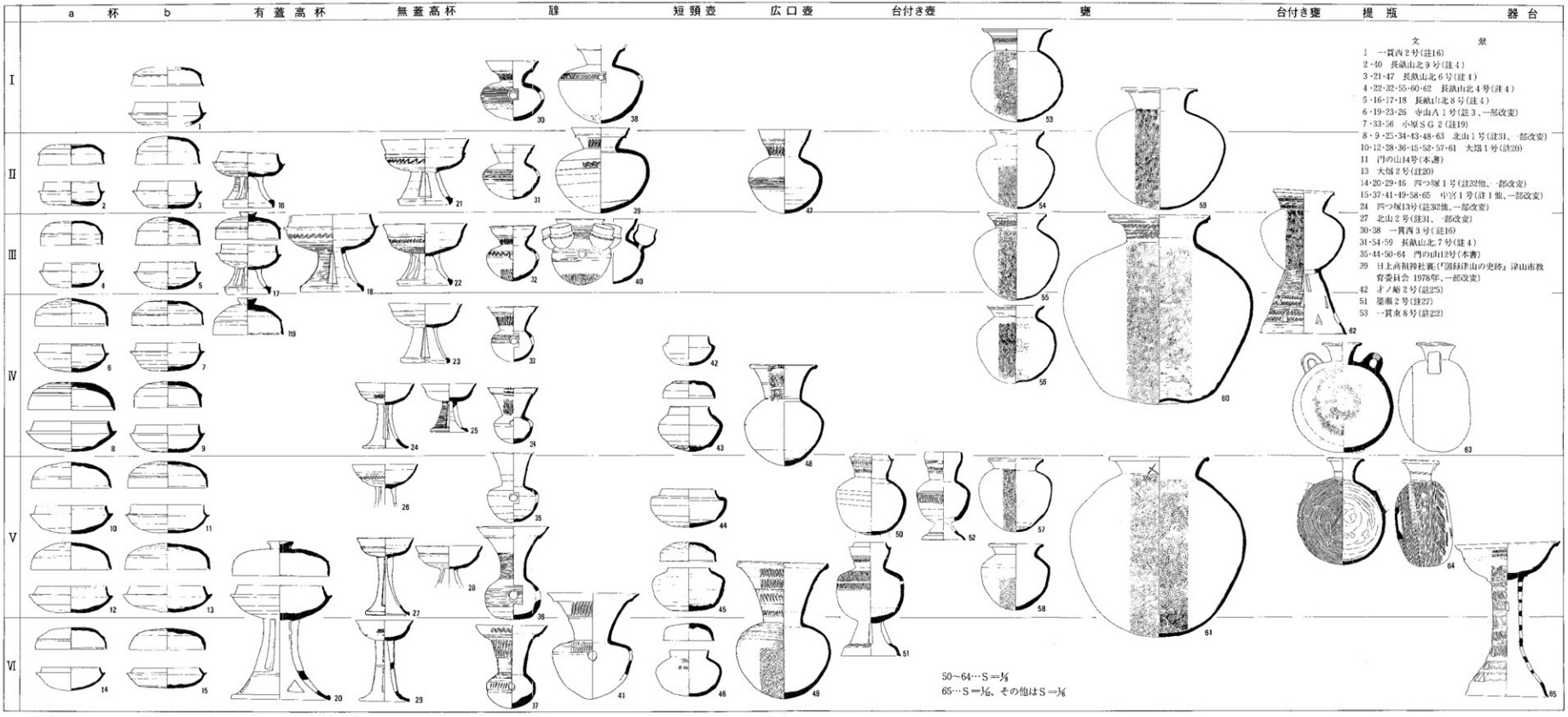
杯　各期を通じ変遷がおえ編年の基準となる器種である。Ⅰ期に関しては、出土例が少なく

全体像が分かるものは少ないが、蓋・身とも偏平であり蓋は口縁部が大きく外反し、身も立ち上がりが器高の半分近くあり端部をややシャープに丸くおさめている。Ⅱ期以降は、身の立ち上がりの端部に面をもつものと丸くおさめるもの両者が共存していく。ここで前者のセットをａタイプ、後者のセットをｂタイプと呼称して以下説明を加える事とする。ａタイプ（面をもつもの）は、Ⅱ～Ⅳ期を通じ口径が大きく、器高が高くなり、蓋の天井部、身の底部が丸みをもってくる。特にこのⅣ期の段階に口径が最大に達する。Ⅴ期になると身の口縁端部の面がややシャープさを欠きｂタイプに近い形態となり明確な面をもつものが少なくなる。また、Ⅳ期に最大に達した口径はⅤ期以降今度は縮小化していく。また、立ち上がりに関しては、Ⅱ～Ⅲ期はほぼ垂直に立ち上がっているが、その後はやや内傾し立ち上がりが短くなる傾向がある。ｂタイプ（丸くおさめるもの）に関しても、基本的にはⅡ～Ⅴ期に至って口径が大きくなり、Ⅴ期に最大径に達し以後は口径は縮小する。器高もａタイプと同様な傾向である。また立ち上がりの傾向は基本的にはａタイプと同様であるが、端部の細部を見れば同一期においてもかなりの個体差が見られ、このことは美作における地方窯の盛行による工人間の技法の違いの現れと考えられ、変遷図に載せた類例以外にも様々な様相が見られる事から、今後窯ごとの細分化も可能と考えられる。これについては今後の課題である。

有蓋高杯　現段階ではⅡ期から副葬され始める。Ⅱ～Ⅲ期が短脚１段透かしの盛行期で透かしは方形３方向を基本とする。口縁の端部の構造は杯の場合と同様面をもつものと丸くおさめるものとがあるが、杯の場合の様に全期を通じての変遷は現時点では類例も少なくおえないがいずれは細分できるものと考えている。脚部の端部を下方につまみ出しているのが特徴である。Ⅳ期に至っては蓋のみしか出土していないので全容は不明であるが蓋を見る限りでは、細部の作りが粗雑になり焼きもやや悪いものが多くなる。Ⅲ期の段階でやや大きめで杯部に波状文などを巡らすものもみられるがこの類例は少ない。Ⅴ期の後半頃になり今度は長脚で２段の透かしを持つ大形となる。透かしは上段が長方形、下段が三角形が基本である。この短脚と長脚への変遷にはやや断絶の時期がある。

無蓋高杯　Ⅱ期から副葬され始めほぼ全期にわたって変遷する。Ⅱ～Ⅲ期は短脚１段方形透かしでⅣ～Ⅴ期は脚がやや長くなったものと長脚１段方形透かしの両者が共存する。Ⅴ期以降脚は最大に長くなり、Ⅳ期に至り方形２段透かしとなる。

壺　Ⅰ期から副葬され、Ⅰ～Ⅱ期を通じては小形と大形の２種類が存在する。小形に関してはⅠ～Ⅲ期を通じ玉ねぎ型の胴部に短い頸部がついている。Ⅲ期になるにつれ口縁端部を外方へつまみ出す傾向が著しい。Ⅰ～Ⅲ期の頸部外面には波状文を施すもの、胴部外面には、カキ目を施すものまた両者を併用するものなど様々である。Ⅳ期になると胴部が球形に頸部は長くなり器高の半分程になる。また口縁端部を外方へつまみ出す傾向は前段階から続く。Ⅴ期以降はさらに頸部が長く口縁部はラッパ状に開く形状になる。外面を波状文やカキ目や列点文で装



第36図 美作地方須恵器変遷図

飾するものなどが顕著に見られる。また、大形は類例が少ないものの１－Ⅱ期にのみ見られ、小形同様短い頸部がついている。なお、Ⅳ期に見られる大形のものは明らかにⅠ～Ⅱ期に見られるものの系譜を引くものではないが、この段階に出現する器形であろう。その他めずらしいものとしては子持ち壺がⅢ期頃見られる。これは胴部がやや球形を呈する事からⅢ期の中でも新相の特徴を持つものである。

短頸壺　Ⅲ期から副葬される。蓋との明瞭なセット関係が分かるものは少ないが、全体的な傾向としては新しくなるにつれ胴幅が広く大きくなり、口縁部の立ち上がりも短くなる様相のものが多いが、全般的な変遷としては捉えにくい器種ではある。

広口壺　この器種に関しては、特にⅡ－Ⅲ期においては、やや頸の長い甕との区別が難しいものが多くそのため明瞭な類例が少ない。ここでは頸部が器高の３分の１以上で口縁がラッパ状に開くものを取り扱っている。Ⅰ期で壺の胴部のみが出土している例があるが、頸部の形状が不明のため即断はできないが少なくともⅡ期には副葬されている。前述のように比較的類例が少ないものの、Ⅳ・Ⅵ期に見られる事からほぼ全般にわたって変遷していった器種と考えられる。頸部の形態も壺の場合と同様に新しくなるにつれ長くなり、口縁部がラッパ状に開く傾向がある。頸部外面に区画を施し波状文の装飾を行う特徴は全般を通じ普遍的なものであろう。

台付き壺　有蓋と無蓋とがあるが全容のわかる類例は少ない。いずれもⅤ期から副葬され始める。有蓋のものの立ち上がりの特徴は杯の場合同様内傾して端部は丸くおさめている。頸部、胴部外面に波状文、列点文などで装飾するものがある。なお台の部分については詳細な変遷は不明である。無蓋についても詳細は不明であり今後の類例の増加を待ちたい。

甕　およそ器高30㎝前後で分け小形と大形とに分類できる。小形は１期から副葬され始め、口縁端部に特徴がある。上方に断面三角形にシャープにつまみ上げるものから、そのシャープさがなくなり最後にはつまみ上げる部分が小さくなるものや内傾させるものなどに変遷する。この傾向は大形についても同様でⅤ期になると逆に口縁外面下方に垂れ下がってしまうものもある。また、両者とも胴部内面のタタキの当て具痕はⅡ～Ⅲ期は丁寧に撫で消しているがそれ以降はその痕跡が明瞭に残っている。

台付き甕　Ⅱ・Ⅲ期頃から副葬される器形であり、上部の甕については前述の甕の特徴と同様である。他期の資料については類例が少なくその変遷については明瞭でない。ラッパ状に開く台の部分には方・三角形の透かしが見られ、波状文などで装飾を施しているものが多く、端部は外方につまみ出している。

提瓶　Ⅳ期後半から副葬され始める。ほぼ球形の胴部に頸部がつき、口縁端部を上方につまみあげるものから外方へつまみ下げるものへと変遷する。胴部外面のカキ目は、次第に簡略化してくる。Ⅳ－Ⅴ期の把手は、すべて環状を呈する。

器台　全体像のわかる類例は少ない。Ⅴ期から副葬され始める。筒状の脚部に椀状の杯部がついている。脚部には方形ないしは三角形の透かしが見られ、波状文などで装飾を施している。

以上各器種の変遷をみてきたが、次にこれらにいわゆる陶邑の須恵器編年を照らし合わせてみると、少なくともⅠ～Ⅲ期まではスムーズに照らし合わせられる事が可能であるが、それ以降はかなりの個体差がみられそう簡単にいかないのが現状である。この事は、Ⅳ期以降が当地域における地方窯の定着・盛行期であり、各工人ごとにかなり個性的な製品を作っている事が大きく起因していると考えられる。この窯ごとの様相をまず捉える事が先決であるが、その実態が不明である現状では十分把握しきれていない。そのためこのⅣ期以降については、さらに細分化される要素を十分含んでいる。今後はその部分を補充・訂正していかねばならないが、この変遷図で各器種の基本的な変遷は十分捉えられると考えている。Ⅰ期はやや幅をもつが陶邑編年（註５）のTK－208以前に、Ⅱ期はTK－23、Ⅲ期はTK－47、Ⅳ期はMT－15、Ⅴ期はTK－10、Ⅳ期はMT－85にほぼ対応するものと考えられるが、前述のようにⅣ期以降はこれら陶邑編年とはスムーズに符号しない部分が多く、今後須恵器窯が発見されれば独自の編年をおこなっていくべきであろう。さらに次のⅦ期は、今回検討をおこなっていないがいわゆる横穴式石室の盛行期でTK－43に並行する。このⅦ期以降の須恵器変遷については、すでに試みられている（註12）。

(2) 吉井川支流域における横穴式石室導入前の群集墳とその様相

第37～39図、第８～10表に各河川ごとの主要古墳群（首長墳及びⅥ期以前の群集墳）の分布図及び変遷図がある。これをみるとⅡ期以降これら群集墳は爆発的に数を増している事が何える。そして一地域に継続的に作られるものの、長期にわたるものは少なくその消長にはいくつかのパターンがある。大きく次ぎの４パターンがある。

Ａタイプ…Ⅰ期以前のもの

Ｂタイプ…Ⅱ～Ⅲ期のもの

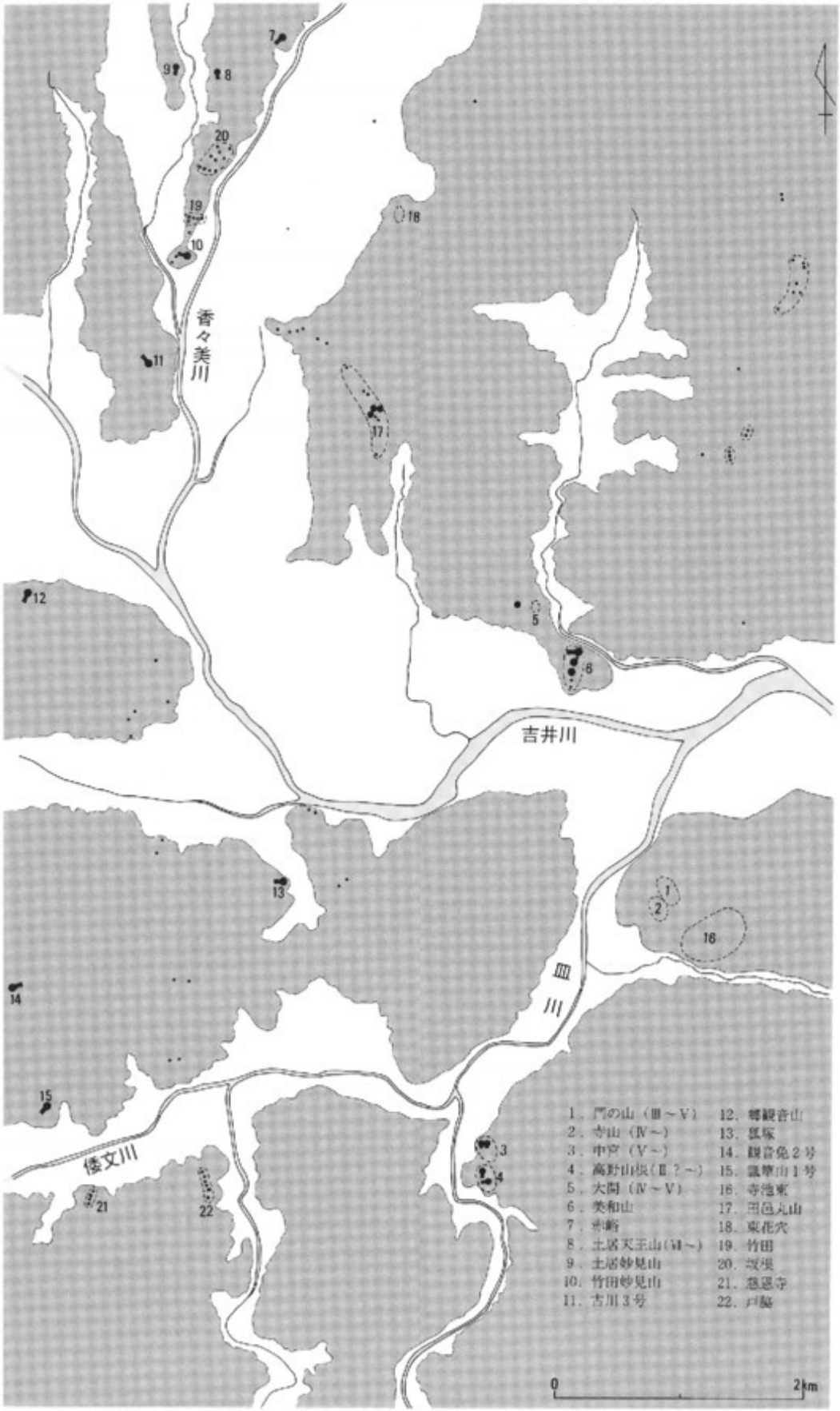
Ｃタイプ…Ⅳ～Ⅴ期のもの

Ｄタイプ…Ⅴ～Ⅵ期のものである。

次に吉井川支流域（皿・広戸・加茂川など）ごとにその変遷を見てみる事とする。

皿川流域（第37図、第８表）

本報告にあるように横穴式石室導入後の群集墳としては美作地域で最大規模を誇っている地域である。また前段階の群集墳も10数基ほど確認されており実数はさらに増えるものと考えられる。その中で今回調査した門の山古墳群は（Ⅲ期）～Ⅴ期（Ｃタイプ）、隣接する寺山古墳群はⅣ～Ⅴ期（Ｃタイプ）と導入後の古墳群で構成されている。この両者の内前者がやや先行している感もあるがほぼ同時期（Ｃタイプ）の所産である。しかし両者には前項で述べたように同時期であっても規模などの面が大きく異なっている。それは直径15ｍほどの円墳・竪穴式



第37図　横穴式石室導入前の群集墳と首長墳（皿・香々美川流域）（S＝1：50,000）

	竪穴式石槨	木棺	箱式石棺	その他・不明	横穴式石室
Ⅰ					
Ⅱ					
Ⅲ		1.門の山8 ●9.5			
Ⅳ	2.寺山A1-B ●14.6	5.大開3 ●13			
Ⅴ	1.門の山12 ●9.5 2.寺山A1-C ●14.6 2.寺山A3 ●14.1	1.門の山14 ●6.8 5.大開4 ●12			3.中宮1 ●23
Ⅵ					3.中宮1
不明	4.高野山根1 ●32				

文献

1. 本書
2. 註3
3. 註1
4. 註14, 15
5. 註13
6. 註44
7. 近藤義郎「赤峪古墳」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会 1986年
8. 註43
9. 土居徹「芝作鏡野町土居妙見山古墳」『古代吉備第6集』 1969年
10. 今井堯他『竹田墳墓群』鏡野町教育委員会 1984年
11. 註43
12. 梅原末治「芝作郷付観音山古墳」『日本古文化研究報告9』 1938年
13. 註43
14. 註43
15. 註43
16. 註1
17. 土居徹他「田邑丸山古墳群」『津山市文化財年報1』津山市教育委員会 1975年
18. 註36
19. 今井堯他『竹田墳墓群』鏡野町教育委員会 1984年
20. 〃
21. 村上幸雄他『稼山遺跡群I』久米南発事業に伴う文化財調査委員会 1979年
22. 〃

第8表 導入前の群集墳・首長墳の変遷（旭川流域）

1．一貫東（Ⅰ）
2．一貫西（Ⅰ）
3．長畝山北（Ⅱ～Ⅲ）
4．茶山（Ⅲ）
5．小原（Ⅲ～Ⅳ）
6．大畑（Ⅴ）
7．崩レ塚（Ⅰ？）
8．隠里（Ⅰ？）
9．金井宮谷（Ⅰ？）
10．長畝山（Ⅱ～Ⅲ）
11．井口車塚（Ⅰ？）
12．日上畝山（Ⅱ～Ⅲ？）
13．日上和田（Ⅱ）
14．日上畝山80号（Ⅱ）
15．天神原（Ⅲ）
16．オノ裕（Ⅲ）
17．六ツ塚（Ⅳ）
18．塗廼（Ⅴ～Ⅵ）
19．ニレノ木南
20．丸尾
21．狐塚
22．杉神社裏
23．玉琳大塚
24．上横野丸山
25．大野木塚（Ⅴ）
26．日上天王山
27．飯塚
28．根の山
29．セウ田
30．正伯塚
31．近長丸山
32．大池ノ西
33．近長四ツ塚
34．三毛ケ池
35．沼
36．河面丸山1号
37．十六夜山

第38図　横穴式石室導入前の群集墳と首長墳（広戸・加茂川流域）（S＝1：50,000）

	竪穴式石槨	木　　棺	箱式石棺	その他・不明	横穴式石室
Ⅰ	1.一貫東2 ●10	1.一貫東3 ■12.4 2.一貫西3 ■8		1.一貫東1 ●8.1 1.一貫東4 ●6.5 1.一貫東5 ■7.4 1.一貫東6 ■7 1.一貫東7 ■7 1.一貫東8 ●8.6 2.一貫西2 ■7	
Ⅱ	3.長畝山北5-1 ●14.5	3.長畝山北6 ●11 3.長畝山北7 ●9.5 3.長畝山北8-1 ●17 3.長畝山北9-1 ●14.5			
Ⅲ	3.長畝山北8-2 ●17 4.茶山1-1 ●21	3.長畝山北3 ●10 3.長畝山北4 ●12 3.長畝山北9-2～5 ●14.5 4.茶山1-2～5 5.小原1 2 ●9 5.小原2-1 ●7.6	5.小原1-1 ●9 5.小原2-2 ●7.6	3.長畝山北2 ●8 5.小原3 ●4	
Ⅳ		3.長畝山北5-2 ●14.5		5.小原ＳＧ2	
Ⅴ		6.大塩1 ●10 6.大塩2 ●10			
Ⅵ					
不明			7.崩レ塚1 ■6 7.崩レ塚2 ■6.5 7.崩レ塚3 ■8	7.崩レ塚4 ●5 8.隠里 9.金井宮谷 ■● 10.長畝山1-2 ●	
文献	1．註22 2．註16 3．註4 4．註18 5．註19 6．註20 7．註7 8．渡辺健治「美作隠里箱式石棺調査報告」『古代吉備第2集』 1958年 9．1990年 津山市教育委員会が測量調査を実施 10．註17				

第9表　導入前の群集墳・首長墳の変遷（広戸川流域）

	竪穴式石槨	木棺	箱式石棺	その他・不明	横穴式石室
Ⅰ				11.井口車塚 ●35	
Ⅱ				12.日上高祖神社裏 13.日上和田 ●19 14.日上鉄山80 ●31.4	
Ⅲ	16.オノ峪1 ●9 16.オノ峪3 ●9			15.天神原3 ●10 15.天神原2008 16.オノ峪2 ●6	
Ⅳ		17.六ツ塚3 ●14 17.六ツ塚1 ●21			
Ⅴ		18.築瀬2 ●9			
Ⅵ				18.築瀬1 ●7.6	
不明		19.ニレノ木南 ● 20.丸尾1号 ●		17.六ツ塚5 ●15 21.狐塚 ● 22.杉神社裏 ● 23.玉淋大塚 ●35	

文献

11. 註28
12. 今井堯他「美作国津山市日上高椙神社裏古墳出土の古式須恵器」『貝塚71』 1957年
13. 行田裕美「日上和田古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第6集』津山市教育委員会 1981年
14. 註17b
15. 註24
16. 註25
17. 註26
18. 註27
19. 註27
20. 註27
21. 註27
22. 註27
23. 註30
24. 註43
25. 註17b
26. 註34
27. 『津山の文化財』津山市教育委員会 1983年
28. 『津山市遺跡地図』津山市教育委員会 1982年
29. 1990年 津山市教育委員会が測量調査実施
30. 註45
31. 註39
32. 〃
33. 『津山の文化財』津山市教育委員会 1983年
34. 『津山市遺跡地図』津山市教育委員会 1982年
35. 今井堯他「美作津山市沼6号墳調査報告」『古代吉備第6集』1969年
36. 註17b
37. 『津山市遺跡地図』津山市教育委員会 1982年

第10表 導入前の群集墳・首長墳の変遷（加茂川流域）

石槨と直径10m以下の円墳・木棺直葬などである。また、副葬品の組成についても様相が異なっておりこの両者の関係については社会構造面も含め再検討していかねばならない。また、この皿川と吉井川とが合流する地点の大開古墳群はいずれも10m前後の円墳4基で構成されⅣ～Ⅴ期（Cタイプ）であるが規模・副葬品の組成の違うものとが共存する（註13）。また、Ⅱ～Ⅲ期と考えられる高野山根1号墳（前方後円墳・全長32m、竪穴式石槨、註14）、Ⅴ期後半の中宮1号墳（帆立て貝式・全長23m、註1）が最初に横穴式石室を採用している。本流域には少なくともⅢ期から導入前の群集墳が作られ始め、Ⅴ期になり他地域に先立ち横穴式石室を採用、その後導入後の群集墳が形成される。よって本流域ではA・Bタイプは確認されていないが、C～Dタイプが継続して作られる。しかしこのように継続して作られるのは上流域の高野山根古墳群周辺のみであり、この地域では本流域における首長墳の系列がおえ、高野山根1号墳（前方後円墳・竪穴式石槨）→中宮1号墳（帆立て貝式・横穴式石室）→高野山根2号墳（前方後円墳、全長40m、横穴式石室、註15）への継続が考えられる。よって本流域ではⅡ～Ⅲ期以降継続して築かれた首長墳形成地域に最初の横穴式石室が導入・採用されたのである。その後Ⅵ期以降の横穴式石室は周辺地域に拡散して小規模ながらも群集をなし、全体ではなかりの大規模な群集墳を形成する事となる。

広戸川流域（第38図、第9表）

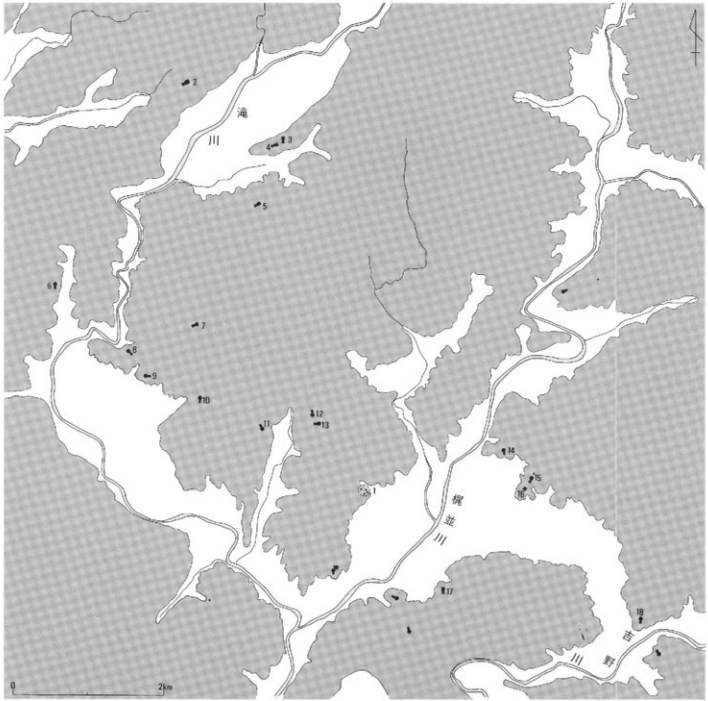
地理的には加茂川と近接しほぼ並行に流れている小河川であるが、比較的多くの群集墳が作られているため一流域として捉えている。Ⅰ～Ⅴ期の全期にわたって群集墳が見られる。Ⅰ期としては一貫西2・3号墳（註16）がありいずれも7～8mほどの方墳である。Ⅱ～Ⅲ期は長畝山北古墳群（註4）がありいずれも直径15m以下の円墳10数基であるが、規模・副葬品の組成などの面で格差がみられるものの、明確なランク付けはできない。また隣接する長畝山古墳群（註17）も円墳10数基で構成されている。出土遺物の須恵器が少なく不明瞭な部分が多いが、規模・埋葬施設などからして長畝山北古墳群とほぼ同時期の所産と考えられる。また、Ⅲ期には、全長21mの前方後円墳・茶山1号墳（註18）、直径4～9m前後の円墳・小原1～3号墳、Ⅳ期は小原1～3号墳に隣接する小原土壙墓（註19）がある。Ⅴ期は直径10mの円墳・大畑1・2号墳（註20）があり、なおこの1号墳には6基の埋葬施設が確認され新旧の特徴をもつ須恵器が副葬されている。本流域ではいわゆる横穴式石室導入期（Ⅴ期後半～Ⅵ期）の古墳群はみられず、その後の横穴式石室墳は群を構成せずに単独に存在するものが多い（註21）。本流域ではAタイプはみられるものの現時点ではその実数は少ない。その後はB・Cタイプと場所を変え継続するが、Dタイプは作られない。導入後の古墳も群をなさず散在的に存在する。本流域における首長墳は、Ⅰ期以前と考えられる一貫東1号墳（前方後円墳、全長31m、註22）からやや断絶し、Ⅲ期の茶山1号墳（前方後円墳・全長20.6m）以後は前方後円墳は作られていない。

加茂川流域（第38図、第10表）

吉井川との合流地点でⅡ期からの山上畝山古墳群（註23）が存在し、直径15m前後の円墳60基ほどで構成されているが、調査例が少なく埋葬施設の構造などに関しては不明瞭な部分が多い。同じくⅡ期としては大神原2008土壙墓、Ⅲ期は直径10mの円墳・天神原３号墳（註24）などがある。この大神原古墳群は直径10～20mの円墳12基で構成されているが出土遺物が少ない。そのため時期は明確でないものの３号墳や2008土壙墓などからⅡ～Ⅲ期（Ｂタイプ）の古墳群と考えられる。またⅢ期としては、直径６～９mの円墳・オノ峪２・３号墳（註25）がある。Ⅳ期は直径14mの円墳・六ツ塚３号墳（註26）、Ⅴ期は直径９mの円墳・築瀬２号墳、Ⅵ期は直径８mの円墳・築瀬１号墳（註27）などがある。本流域ではⅡ～Ⅵ期にいたる古墳群がみられ、詳細に観察すればさらに小地域ごとにグルーピングも可能である。加茂川流域では、やや類例は少ないがＡタイプは現時点では見られず、Ｂ～Ｃタイプを中心に展開している。この地域にもＤタイプは見られず、導入後の古墳も単独ないしは数基が群をなし散在的に存在する。本流域の首長墳の系列は、１期（？）の井口車塚古墳（帆立て貝式・35m、註28）→Ⅱ～Ⅲ期の山上畝山80号墳（前方後円墳・31.4m、註29）→玉琳大塚古墳（前方後円墳・36m、註30）と続くが、広戸川流域同様横穴式石室の導入は遅れる。

その他の吉井川支流域として梶並川流域がある（第39図）。本流域にはⅣ期の直径19.2mの円墳・北山１号墳やⅤ期の同２号墳（註31）などがある。特に１号墳の須恵器はⅣ期の典型的なものである。また、美作地方北西部の旭川上流域の蒜山地域（第35図参照）では直径19mの帆立て貝式・四ツ塚13号墳はⅣ～Ⅴ期（Ｃタイプ）の特徴をもつ古墳で同規模なもの約11基で構成されている（註32）。また、１号墳は、直径24mの円墳でⅤ期後半の古墳であり、前述した中宮１号墳とほぼ同時期に横穴式石室を採用している。梶並川流域の北山古墳群周辺では、首長墳の系列として、前述の他地域とは異なり前方後方（円）墳とが展開している。楢原寺山古墳（前方後方墳・全長47m、註33）→上経塚２号墳（前方後円墳・全長37m、註34）→Ⅴ期の緑青塚古墳（前方後円墳・全長36m、註35）と続く。類例は少ないが現時点での群集墳はＣタイプから展開し、Ｄタイプは見られずそのため導入期の横穴式石室墳は発見されていない。さらに旭川上流域蒜山地域の四ツ塚古墳群はＣ・Ｄタイプを中心とした古墳群で加茂川流域同様Ｄタイプが見られる地域であり最初に横穴式石室を導入している。本流域における首長墳の系列やＡ・Ｂタイプの群集墳の様相などについては、詳細は明確ではない。さらに前方後円墳がかなり集中する地域として、香々美川・倭文川流域がある（第37図参照）が、須恵器を伴う導入前の群集墳については調査例が少なく不明瞭な部分が多いので今後の調査に期待したい。

次に以上を踏まえ本地域における全般的な様相の概略を述べてみたい。現段階でⅠ期から群集墳の形成が確認されているのは、広戸川流域のみである。本流域を見ると、方墳が多く採用されており、Ⅱ期以降のほとんどが円墳である事を考えるとこの期を境としてこれら群集墳は

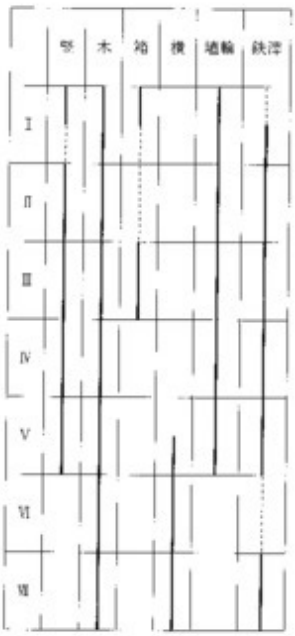


第39図　横穴式石室導入前の群集墳と首長墳（梶並・滝川流域）（S＝1：50,000）

1．北山（Ⅳ～Ⅴ）　註31
2．槇月寺山　註46
3．美野高塚　註43
4．美野中塚　〃
5．田井高塚　〃
6．愛宕山　〃
7．岡高塚　〃
8．琴平山　今井堯・渡辺健治「美作勝央町琴平山古墳」『古代吉備 第5集』古代吉備研究会　1963年、註43
9．殿塚　註43
10．よつみ乢　〃
11．鍛冶屋畑　〃
12．上相中塚　〃
13．上相東塚　〃
14．金塊山　〃
15．上経塚2号　〃
16．上経塚1号　註34
17．牧原寺山　註43、註33
18．緑青塚　〃、註35

方から円へ墳形が変化した事が推測され、さらにこのⅡ期以降これら群集墳は数を増しただけでなく須恵器を中心に副葬品が多種多様となってきている。そのためⅠ期以前の段階のこれら群集墳がどのような様相を呈していたかは、副葬品の種類が少なく不確かになっている場合が多い。現にほとんど副葬品を伴わない方・円墳群は本地域内でも確認されている。例えば、崩レ塚1～4号墳（註7）、一貫東古墳群（註22）などがそれである。また、やや離れるものの鏡野町・東穴花古墳群（註36）、久世町・中原古墳群（註37）などもその類例で、前者が方墳のみで、後者が円・方墳から構成される古墳群で、いずれも副葬品は鉄器、玉類のみないしは皆無の場合が多く、そのため後者の場合は立地や規模の面などから円墳の優位性を指摘し円→方の階層的な序列が考えられるものもある。おそらくこのような古墳群がⅠ期ないしはそれ以前に含まれるものと考えて差し支えなかろう。このように須恵器副葬前段階については、副葬品が少ない事から墳形・規模・埋葬施設以外に立地的な面も考慮して群構成などを考えていかねばならない。墳形の面から言えばこれら小規模な導入前の群集墳は基本的にはⅡ期を境に方から円へ墳形を変え、前段階の優位性をその多くがそのまま継続し続けた事が伺え、その実数が前段階に比べかなり増大する背景に、何らかの社会的要因が大きくかかわって来ている事は確かである。そして本地域ではⅤ期の新段階には横穴式石室を一部地域でのみ採用し、その後はこの最初に採用した皿川流域は、かなり大規模な群集墳を形成するものの、その他の地域ではこれほどの規模のものは無く、単独ないしは数基単位で構成される場合が多い。このように地域によって様相が異なる背景が、どのような影響化の元なされているのかはさらに検討を要する事である。

次に、導入前段階のその他の埋葬施設の様相を簡単に述べてみたい（第11表）。使用されている埋葬施設には、竪穴式石槨、木棺直葬、箱式石棺などがある。竪穴式石槨は、いわゆる前期の長大なものとは異なり短小なものである。皿・広戸・加茂川流域いずれでも見られ、少なくともⅡ期の段階には採用されている。これら短小型の初現は、吉備地方南部では弥生時代の墳丘墓に見られるが（註38）、本地域では加茂川流域の近長丸山1号墳・第3主体が初現で前期の所産である（註39）。木棺は普遍的なものでほぼ全流域に見られるが、棺の形式の詳細については検討の余地を残している。箱式石棺を中心の主体部に使用するのは、広戸川流域の小原古墳群など少数である。中心以外の周溝内埋葬などに使用する例は他地域でも見られるものの中心に使用する地域は少なく一つの地域性であろうか。現にこの地域では、Ⅰ期以前に入ると考えられる群集墳は、箱式石棺を中心主体に採用しているものが多く、その系譜を引くものの可能性



第11表　埋葬施設等消長表

が指摘できる。以上からこれら中心埋葬の竪穴式石槨や箱式石棺は伝統的な葬制で、逆に箱形木棺などは新要素の葬制として捉え、両者が共存する事やそれに相対し埴輪の有無、副葬品の組成などの差異が生じている事を総合的に勘案し、当時の社会的優位性を指摘する考えもある（註40）。

さらに鉄生産との関連で鍛冶道具や鉄滓の出土を見ると（第11表）、Ⅱ～Ⅲ期にはすでに副葬されており（註41）、本地域ではすでに6世紀後半～7世紀前半頃には鉄の製錬が行われていた事（註42）も判明しつつある。そのため製鉄技術がかなり進んだ地域であったと考えられ、その意味からもこの地域の重要性が伺い知れる。

(3) 美作における横穴式石室導入前の群集墳の成立と展開

美作において一早く横穴式石室を導入させたのは、吉井川支流の皿川流域と旭川上流域の鼎山地域の2地域のみでⅤ期の後半からである。この両地域を概観してみても、その立地は当時の農業生産を基盤とした地域とは考えにくい場所である。これは従来から指摘されている事（註9）ではあるが、少なくともその背景には、例えばよく言われている鉄生産などの手工業生産技術の発達により、それらの掌握を任せられた有力層の台頭などがあった事は疑いのない事実であろう。よって、この皿川流域は、これらを背景としているものの、古墳の数からして他地域を含めた「集団墓域」の候補として採用され、以後使用され続けてきた地域の可能性が考えられる。以下、この皿川流域と他流域を比較検討しながら、このような問題を考えて行きたい。

前項での概略からいわゆる導入前段階のⅢ期以前の群集墳は吉井川以東の加茂・広戸川流域を中心に展開している。またⅠ期以前の段階では、副葬品の少ない方墳と円墳を中心とした群構造の一端が除々にではあるが浮かび上がって来ている。現時点では本流域で明瞭な資料が少ないため、これについて今後改めて言及したい。ここでは莫大に数を増して行くⅡ期以降について考えてみたい。Ⅱ～Ⅲ期の群集墳（Bタイプ）としては加茂川と吉井川との合流地点の日上畝山古墳群が、約60基ほどで構成されており美作では最大規模を誇っている。この時期のこれだけの群集墳は皿川流域他でも見られない。しかもこの日上畝山古墳群を形成させた前段階の群集墳は同地域周辺では見られず、この事からⅡ期になり新たに墓域として使用された地域である。しかもこの古墳群の造営期間はほぼⅢ期までで非常に短時間の間に60数基もの多くの古墳が同時期に作られている事から、この周辺地域だけでなくかなりの広範囲の人々が葬られている可能性が指摘でき、「集団墓域」として選地されていた地域であった事が考えられる。この群集墳は全長31.4mの前方後円墳・80号墳1基を頂点としその他は円墳で構成されており、この円墳も規模などからいくつかに分類が可能である。また、埴輪をもつものが多い事からいわゆる首長権継承儀礼の系譜を引く埴輪祭祀に携わる人々が葬られていた墓域であった可能性が大きい。逆にほとんど埴輪を伴わない群集墳としては、10数基の小規模単位で構成された長畝山北古墳群などがあり、その中でも馬具の一部を伴うものなど副葬品には優劣をつける

程の差異、つまり階層の差が生じている事も確かである。その意味からもこの時期は、円墳であっても規模、埋葬施設の構造、埴輪の有無、副葬品の組成などでかなりのランク付けの存在が考えられる。そして、次のⅣ～Ⅴ期（Cタイプ）は、今度はこれほどの大規模群集墳はどこの流域にも作られず、各地に散在し数基単位で作られる場合が多い。この事は前段階に手工業生産技術などの普及・発展に伴い急速に力をつけてきた新興台頭者がかなり統合・分散化され、一方では在地化してきたための現象と解されよう。この事はすでに畿内などの中央部で採用され始めた横穴式石室導入に向け、かなり地方にも統制圧力が強くなり、つまりこの期間がこの導入に向けての社会構造が再編された時期である。そしてⅤ期の後半頃になり皿川流域の中宮古墳群と蒜山地域の四つ塚古墳群で社会構造の再編に伴う副産物としての横穴式石室の導入が試みられたのである。そしてこの選ばれた地域は、以前に群集墳が作られた地域を避け、皿川流域の場合はⅡ～Ⅲ期以降首長墳の系列がおえる地域であり、この事には、例えば交通面の掌握（吉備地方南部と結ぶ交通の要所）など様々な別な意味での社会背景が関与している場合も考えられ、今後このような群集墳の立地条件に関しても目を向けていく必要がある。以後はやや断絶の期間（横穴式石室定着・伝播の準備期間）があり、Ⅵ期の後半以降から各地で急速に横穴式石室を採用して行くようになる。

以上から本地域では群集墳の形成に関して２つの画期が考えられる。①はⅡ期以降これら導入前の群集墳の数が増え、墳形を方から円に変え円墳志向が強くなり、そして副葬品の多様化に伴い、例えば須恵器生産の開始によりこれを副葬・供献する事が始まり、その需要の増大に伴い、それらを補うための須恵器窯が周辺地域で作られ始め、さらに同一群集墳内で規模、副葬品の組成などの違いからいわゆる階層制が指摘できる事である。②はⅡ期以降各支流域で展開した群集墳が統合、分散、再編成されその影響化の元、Ⅴ期の後半になり皿川流域などある一定の地域に横穴式石室が導入される事である。そしてこの導入の背景には新興勢力の在地的首長層及び構成員の墓地をある一定地域（例えばⅡ～Ⅲ期では日上蔵山地域など）に規制させるだけの力をもちあわせていた「畿内政権」の存在が考えられる。

美作地域での首長墳の系譜は最古の前方後円墳・日上天王山古墳（全長55m、註43）から美作最大の美和山１号墳（全長80m、註44）、正仙塚古墳（全長56m、註45）の系列と植月寺山古墳（全長90m、註46）、美野中塚古墳（全長52m、註43）、岡高塚古墳（全長52m、註43）の大まかに２系列が考えられる。その後は、50m以上の前方後円墳は作られていない。この事は畿内においての５世紀末頃を境に大規模古墳の様相が一変しそれに伴い各地の首長層の政治的連合のあり方が大きく変化する社会的様相（註47）と良く似ていると言うよりも、その影響化に本地域が置かれたための現象と捉えるのが妥当と考えられる。その後は本地域では全長30m前後の前方後円墳などが首長墳として作られ、加茂川流域では帆立て貝式の井の口車塚古墳、広戸川流域では茶山１号墳、皿川流域では高野山根１号墳など小規模前方後円墳などが在地的

首長として、その中間的な統率の担い手として存在していた事が考えられる。

一般にはこのような群集墳の出現を古墳の変質として捉え、共同体の階級分解の進行による家父長制家族の広範な成立・成長を契機として横穴式石室の出現を捉える考え（註１）や墳墓の造営そのものがきわめて共同体的行為であり、その墳墓地域を共通にすることは同族関係の一つの表現方法で、擬制的大同族集団の形成の現れであると言った考え（註48）さらには畿内政権と在地首長とが直接的に政治関係を取り結びその地位の序列化を促進する方策として「墓域」を与える墓域賜与論（註49）などがある。これについては、反論もあり（註50）いずれにせよこのような群集墳の出現には汎日本的な社会的背景があった事は疑いのない事実である。本地域では、Ⅱ期以降前述のような小規模な前方後円墳が各支流域ごとに展開し、この事から一極的な支配体制から多極的なものへと変化し、小地域ごとでかなりの勢力を蓄え展開していき、この事はいわゆる畿内政権の支配体制の編成に伴う地域的な現象でこれには、例えば首長層を通して間接支配の解体を意図した畿内政権が台頭する有力家族体を直接支配しようと試み、これにからむ祖霊祭祀の変質が単葬墓的埋葬から家族体単位への共同墓地への転化をうながした結果とする考え（註51）などがあり、その意味からもかなり統制力が本地域にも及んでいた事が考えられる。そしてその事は、Ⅱ～Ⅲ期に今までの農業生産の発達や新しい手工業生産の普及・発展に伴い、これら台頭してくる新興勢力層の首長並びに構成員の墓域として、加茂川の日上畝山地域などに大規模な集団墓地を形成させ、そこに強制的に群集墳を作らせる事で、軍事面を軸とした支配態勢の再編を行ったため、次のⅣ～Ⅴ期に至ってはこれ程大規模な群集墳はつくられず、この再編・統合化による現れとして各地域に拡散する事となったのではなかろうか。そしてⅤ期になり皿川流域にのみ最初の横穴式石室が導入されたのは、Ⅰ期ないしはそれ以前から継続して、導入前の群集墳が多数作られた加茂・広戸川流域などでは、地域的共同体を媒介とした、新たな新興勢力間の結び付きが強く、あえて畿内政権が本地域を同族関係の支配統制化に入れる場合、このような根強い地域をまず制圧し統合分散化し、あえてⅠ期以前の群集墳の少ない皿川流域に横穴式石室を導入させ、この地域を導入後の「集団墓域」として掌握させたのであろう。しかし、導入後においても、各流域ごとに擬制的とも言える同族支配に対する根強い抵抗があり、そのため横穴式石室導入後すぐには広まらずやや期間をおいて他地域にも拡散し広がっていったのではなかろうか。その最、本地域では「陶棺」と言う特徴的な棺桶を媒介として広がっている事も重要な事実であり、この事が他地域における導入への背景とやや異なる点である。この意味合いについては改めて言及したい。

以上、美作地方の特に吉井川支流域と言った小地域の群集墳の様相並びに変遷についてのみ私見を述べてきた。小稿の論旨は先の「墓域賜与論」の一部に追随したものであり、これには反論があるように、これを実証させるための資料はまだまだ不十分である。今後の調査で群集墳にかかわる資料がかなり蓄積され、その際これら群集墳は今回十分な検討はしていない規

模・埋葬施設の種類・副葬品の種類や配置など様々な要素で分析が可能となり、さらに細かな社会構造の一端が明らかになり、さらには、他地域の様相と比較検討によりこれらを実証させる資料の蓄積をおこなっていかなければならない。それに関しては稿を改めたい。なお先学諸氏の御叱正をお願いする次第である。

（註１）中島壽雄・近藤義郎『佐良山古墳群の研究 第１冊』津山市　1952年
（註２）今井堯・河本清「津山市平福古城古墳発掘報告」『津山市文化財調査略報 第１集』津山市教育委員会 1960年、出土遺物に関しては今回再整理・実測を行ったが、一部所在不明となっている遺物もあった。詳細は本報告書附編を参照されたい。
（註３）河本清「美作津山市寺山Ａ１号墳」『古代吉備 第６集』古代吉備研究会　1969年
（註４）行田裕美・木村祐子「長畝山北古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第45集』津山市教育委員会 1992年
（註５）田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981年
（註６）美作町・北山１号墳、津山市・大開３号墳などに見られる。
（註７）行田裕美・小郷利幸「崩レ塚古墳群・クズレ塚古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第31集』津山市教育委員会　1990年
（註８）石部正志「群集墳の発生と古墳文化の変質」『東アジア世界における日本古代史講座４』学生社 1990年
（註９）今井堯・近藤義郎「群集墳の盛行」『古代の日本４』角川書店　1970年
（註10）森岡秀人「群集墳の形成」『古代を考える 古墳』白石太一郎編　吉川弘文館　1989年
（註11）木棺直葬墳としては勝央町・小中古墳群（高畑知功・柴野克己「小中古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告７』岡山県教育委員会　1975年）、さらに横穴墓が県北西部を中心に見られる（哲西町・鳴山１・２号横穴など）。
（註12）村上幸雄『権山遺跡群Ⅱ』久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1980年
（註13）津山市教育委員会が1991年に発掘調査を実施、報告書作成中。
（註14）安川豊史「高野山根１号墳・２号墳」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会　1986年
（註15）内山敏行・大谷晃二・田中弘志「佐良山古墳群高野山根２号墳について」『古代吉備 第13集』古代吉備研究会　1991年
（註16）行田裕美「一貫西遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集』津山市教育委員会　1990年
（註17）ａ河本清「美作考古学の現状と課題」『古代吉備 第７集』古代吉備研究会　1971年
ｂ今井堯「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史 第１巻 原始・古代』津山市史編さん委員会 1972年
（註18）保田義治「茶山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第27集』津山市教育委員会　1989年
（註19）行田裕美・木村祐子・小郷利幸「小原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第38集』津山市教育委員会　1991年
（註20）津山市教育委員会が1986年発掘調査を実施、報告書作成中。調査担当の行田裕美氏に御教示を得る。
（註21）クズレ塚古墳（註７）、一貫西１号墳（註16）など
（註22）行田裕美・湊哲夫「一貫東遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第43集』津山市教育委員会　1992年
（註23）「六ツ塚古墳群・日上畝山古墳群」『津山市文化財調査略報No４』津山市教育委員会
（註24）河本清・橋本悠司・柳瀬昭彦他「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告７』岡山県教育委員会　1975年
（註25）ａ中山俊紀・湊哲夫「オノ峪遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第18集』津山市教育委員会 1985年
ｂ中山俊紀「オノ峪古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第23集』津山市教育委員会　1988年
（註26）ａ「六ツ塚古墳群調査略報」『津山市文化財調査略報３』津山市教育委員会　1962年
ｂ河本清「六ツ塚古墳群」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会　1986年
（註27）行田裕美「築瀬古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第13集』津山市教育委員会　1983年
（註28）『津山の文化財』津山市教育委員会　1983年、1992年津山市教育委員会が確認調査を実施。
（註29）（註17）ｂ参照
（註30）今井堯「津山市川崎玉琳大塚調査報告」『津山市文化財調査略報第１集』津山市教育委員会　1960年

(註31) 二宮治夫・松本和男「北山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4』岡山県教育委員会　1973年
(註32) 近藤義郎他『蒜山原四つ塚古墳群（改訂版）』岡山県八束村　1992年
(註33) 近藤義郎「檜原寺山古墳」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会　1986年
(註34) 葛原克人「第5章 古墳時代前期」『岡山県の考古学』近藤義郎編　吉川弘文館　1987年
(註35) 松本和男「緑青塚古墳の出土遺物について」『岡山県埋蔵文化財報告5』岡山県教育委員会　1975年
(註36) 立石盛詞「鏡野町東花穴古墳群の調査」『調査団ニュース第3号』岡山県遺跡保護調査団　1992年
(註37) 松岡浩太郎「中原古墳群」『岡山県埋蔵文化財報告22』岡山県教育委員会　1992年
(註38) 総社市・宮山墳墓群、笠岡市・金敷寺裏山墳丘墓など（『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会1986年など参照）
(註39) 小郷利幸「近長丸山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第41集』津山市教育委員会　1992年
(註40) (註25) b参照
(註41) 鍛冶道具と鉄滓が伴う古墳としては津山市・長畝山2号墳がある（註17）。鉄滓だけとしては長畝山北4・5・6・9号墳（註4）などがある。
(註42) 中山俊紀「緑山遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第19集』津山市教育委員会　1986年
(註43)『前方後円墳集成 中国・四国編』近藤義郎編　山川出版社　1991年
(註44) 中山俊紀「史跡 美和山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第42集』津山市教育委員会　1992年
(註45) 湊哲夫「高野山西正仙塚古墳」『津山市文化財年報1』津山市教育委員会　1975年
(註46) 光永真一「植月寺山古墳」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会　1986年
(註47) 白石太一郎「日本古墳文化論」『講座 日本歴史1　原始・古代1』東京大学出版会　1984年
(註48) 白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」『古代学研究42・43』古代學研究會　1966年
(註49) 広瀬和雄「群集墳論序説」『古代研究15』元興寺文化財研究所　1978年
(註50) 利根川章彦「群集墳をのこした人々」『季刊考古学第16号』雄山閣出版　1986年、この中で利根川氏は、すべての群集墳の被葬者がヤマト政権と政治関係を直接的にもちうるかどうか、群集墳の所在する丘陵がヤマト政権から賜与されていった根拠は何かの2点を疑問点として提起している。
(註51) 村上幸雄「第6章 古墳時代後期」『岡山県の考古学』近藤義郎編　吉川弘文館　1987年

附　編　津山市平福古城古墳群発掘調査報告

(今井堯・河本清「津山市平福古城古墳発掘調査報告」『津山市文化財調査略報第1集』津山市教育委員会　1960年　再録)

津山市平福古城第1号墳

所　　在　津山市佐良山大字平福小字古城18番地

調査経過　津山市神南備山観光道路の整備中に、処女古墳が道路予定コースにあったため、それを保存すべく道路を変更した。新路面をどのようにとっても古墳群中を通るのでどれかの破壊はやむおえない。そいで小墳であり、かつ盗掘されているものを消滅させることにして、6月から7月にかけて調査を行った。

外　　形　円墳、径9.0～9.5m、高さ1.5m、調査前中央部やや南寄りに、中心部に達していないと思われる盗掘跡があった。埴輪・葺石などの施設はない。

内部構造　墳丘中央に大小二つの石室が併行して築かれている。主軸を東西にとり、南石室は内法2.52m、巾35～45cm、石室側壁高40cmを測る。割石を多用しており、両側には蓋石があり、中央部は古い盗掘によって攪乱されている。この石室は梨石・割石を混用しており石室内法2.○m、巾35cm、深さ35cmを測り、床面に赤かつ色土層があった。

墳丘はすべて盛土があり、暗かつ色土・茶かつ色土等の混成土が雑然と積まれてい

る。その上に横穴式石室の手法をもって築かれた石室石棺がある。

南石室の方が石材が大きく整っているだけでなく、北石室の南壁の石材は南石室の北壁より後に積まれたものであることが石の積方からしても明らかである。

遺物出土状態　南石室西側の蓋石の下から線・高杯・杯・鉄鏃が、中央部北壁寄りに壺、東壁に接して提瓶・杯が出土した。北石室内西壁近くからマリ、中央部やや東寄りから壺・杯・マリが出土した。墳丘各部から土師器片が出土している。これは盛土に使用した附近の表土に含まれていた土器片が考えられる。

遺　物　鉄鏃1（尖根形三角形）、須恵器台付壺1、壺1、坩1、提瓶1、マリ3、杯6これらの須恵器は共通しており、4大別した内の第3形式の須恵器と考えられ、このことから群集墳の時期と考えられる。

処　理　処女墳を残すために、群中の破壊墳（小墳）をこわした一例である。

（注）　本古墳は「佐良山古墳群の研究」にある門の山第12号墳に当たるものである。

津山市平福古城第2号墳

所　在　津山市平福と一方の境

調査経過　神南備山観光道路が尾根上を通るためすでに数回の盗掘を受けた本古墳の西半分を通るという予定を変更できないため、やむをえず、こわされゆく西半分の応急調査を行ったものである。

立　地　神南備山からぐっと下降しつつ寺山・門ノ山へとのびる山丘の尾根上。

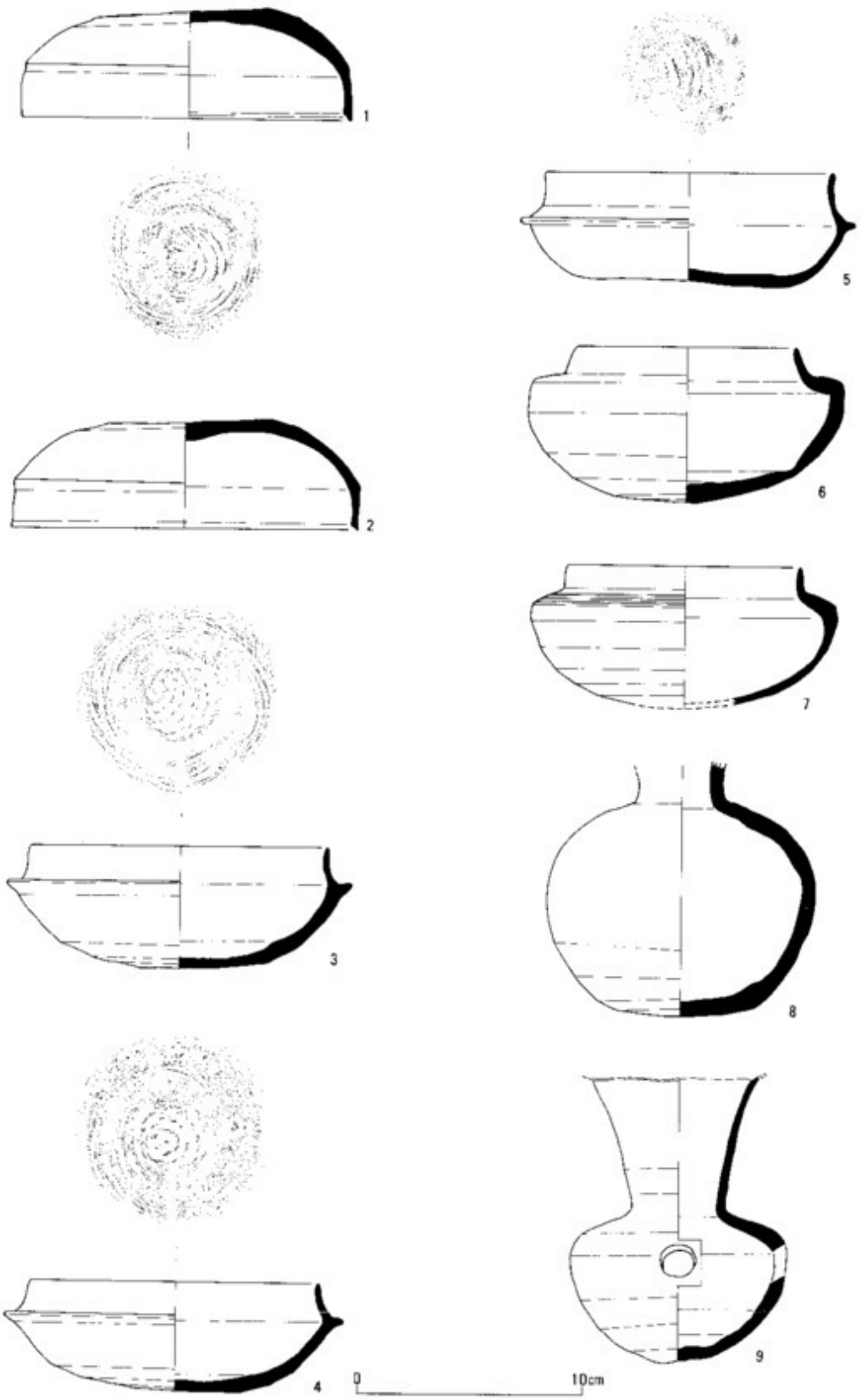
外　形　円墳推径10m強、現高1.5m弱を測し、盗掘によって相当変形されている。

内部構造　石材をとるために、明治初年に掘られたという伝えのとおり、天井石および側壁の上半部を欠いた石組みが発見された。

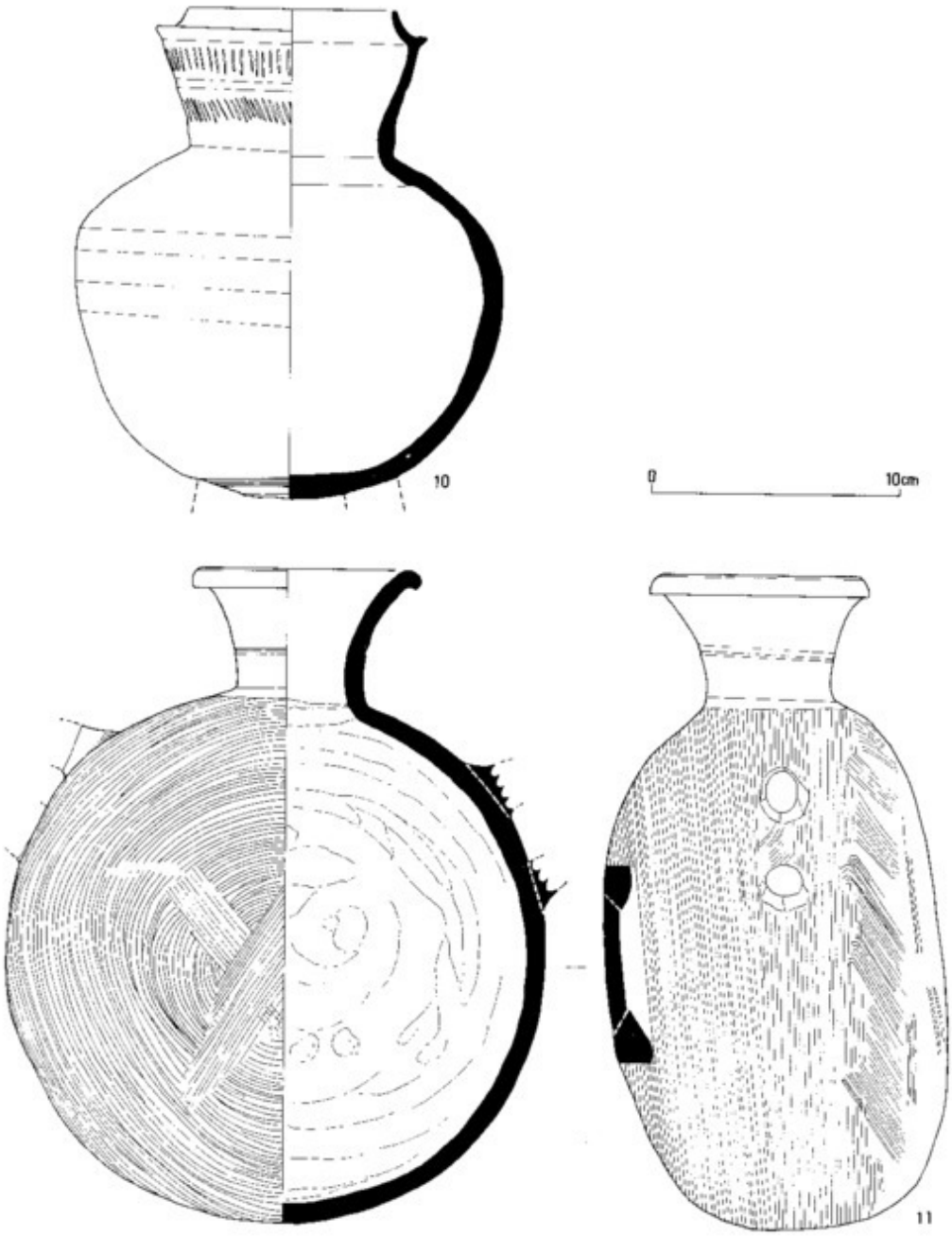
須恵器　（番号は第40・41図、単位：cm）

番号	器種	口径	器高	ヘラ削り	胎土	焼成	色調	備考
1	杯蓋	14.5	5.1	左	1㎜以下の砂粒少量含む	良好	青灰色	内面に同心円当て具痕、3とセット
2	〃	15.5	5.0	右	2㎜以下の砂粒少量含む	〃	〃	4とセット
3	杯身	13.2	5.6	左	1㎜以下の砂粒少量含む	〃	〃	内面に同心円当て具痕
4	〃	12.8	5.0	左	〃	〃	〃	〃
5	〃	13.0	5.1	左	〃	〃	〃	〃
6	短頸壺	9.8	7.1	左	〃	〃	〃	
7	〃	10.4	(7.5)	左	〃	〃	〃	
8	壺		(11.6)	左	緻密で砂粒少量含む	普通	淡赤褐色	口縁部欠損
9	壺		(12.9)		2㎜以下の砂粒少量含む	良好	青灰色	口縁端部を打ち欠いている
10	台付き壺	8.3	(19.9)		2㎜以下の砂粒多量含む	〃	黒灰色	台部欠損
11	提瓶	8.0	26.6		2㎜以下の砂粒少量含む	〃	青灰色	把手欠損

第12表　12号墳出土須恵器観察表



第40図　門の山12号墳出土遺物（1）（S＝1：3）



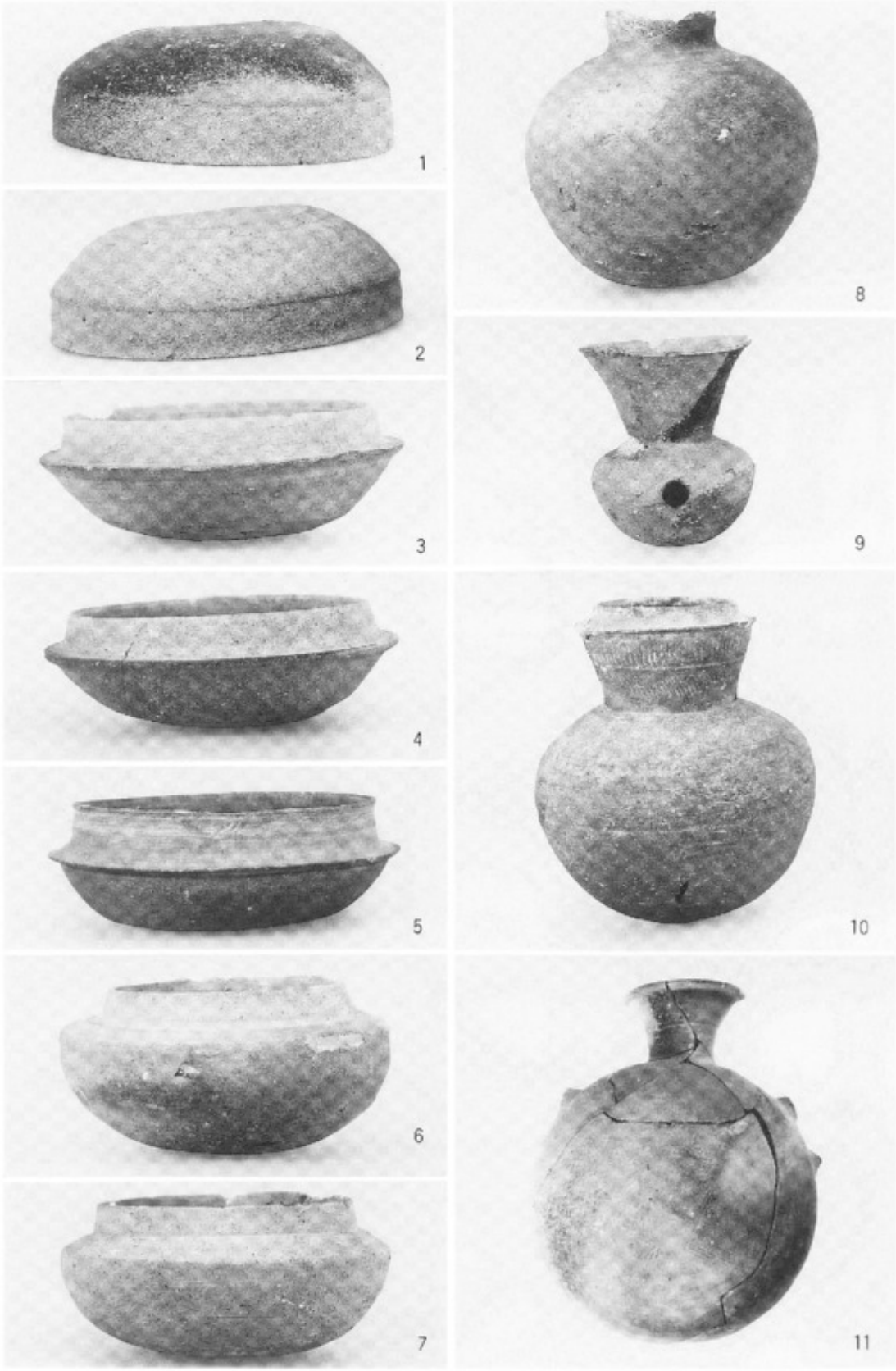
第41図　門の山12号墳出土遺物 (2) (S＝1：3)

構築手法は横穴式石室の積み方であるが、横穴式石室かどうかは断定できない。

内法1m、長さ5m以上

遺　物　須恵器杯、甕の破片多数、土師器もかなりあった。須恵器は4大別編年を使うと第3形式に属し、群集墳の時期のものといえる。

(注)　本古墳は「佐良山古墳群の研究」中の門ノ山第13号墳として記載されているもののようである。



第60図　門の山12号墳出土遺物

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第46集

門の山古墳群

平成4年6月30日

発行　津山市教育委員会

佐良山門の山古墳群発掘

調査委員会

岡山県津山市山北520

印刷　株式会社　美　成

岡山県津山市平福177—2